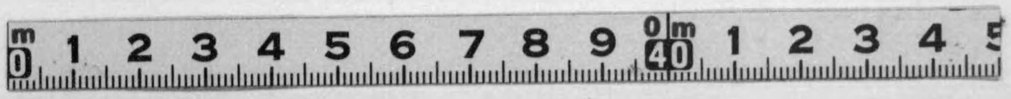
328
378



328-378

御製集

第十卷

大正
5. 10. 21
購求

例言

本編には仙洞御百首一卷、靈元天皇名所百首一卷、同法華經二十八品和歌一卷、櫻町院御集一卷、同坊中御會和歌一卷、同御百首一卷、同御著到百首一卷、桃園天皇御著到百首一卷、合八種八卷を收載したてまつり、なほこれに添ふるに、本會にて謹撰せる東山天皇御製、中御門天皇御製、桃園天皇御製、靈元院御集拾遺、櫻町院御集拾遺の五種を以てせり。

靈元天皇の御製は、御集以外世に傳へたるものに、御幼時御製、仙洞御百首、名所百首、法華經二十八品和歌の數種あり。其中前卷に收めたる御幼時御製七十七首は、寛文三年御十歳より、寛文九年御十六歳にいたる、七年間の御作にかかる。仙洞御百首は點者中院通茂にして、その卷尾に「かずかずにみがけける玉やけがれましかけてかひなき波の藻屑は」正二位通茂上とあり。通茂は寶永二年正月從一位に敍せられたれば、その正二位たりし元祿年中に、この御百首は詠ませ給へるなるべし。名所百首は享保十七年の二月上旬より三月下旬にわたりて詠ませ給へるものにして、崩御五

ケ月前の御製なり。法華經二十八品和歌は、序品より勸發品にいたる各品三首、卽二十八品八十四首の御製にして、詠ませたまへる年月は詳ならず。以上の原本中、仙洞御百首は家藏、他は圖書寮の所藏なり。靈元院御集拾遺に收めたる千首和歌は、一本靈元院樣千題集和歌拔書または法皇御所勅撰千首和歌と題し、卷末に、右千首和歌自享保十五年九月到十六年四月終之。五月二十日於洞裏各賜酒饌。講師爲香朝臣題者民部卿泰行光榮」とあり。親王公卿等二十餘人の和歌千首を撰ぶ。其中御製五十首あり。原本は圖書寮に藏す。

東山天皇御製百五十四首は、內閣文庫所藏の大神宮御法樂千首和歌近代御會和歌集及び圖書寮所藏の公宴月次御會等に見えたるを謹輯したてまつれるものなり。

中御門天皇御製五十六首は、圖書寮に藏せる御會始和歌、公宴御會和歌、靈元院御集、杵城遺事等の群書をさぐりて、採錄したてまつれるものとす。

櫻町院御集には藤原爲村の編輯せる二卷本と編者不明の一卷本とあり。二卷本は詠出年月を記さざれども、一卷本は悉くこれを明記せり。而して兩本いづれも圖書寮に藏す。本書に收めたるは一卷本にして、元文元年(卽位の翌年)より寬延三年(崩御の御年)にいたる十五年間の御製六百五十餘首を載せたり。天皇の歌道に意を用ひさせたまへるは、二卷本に添へたる編者爲村の言に詳なり。聖德をあふぐよすがともなるべければ、いまこれを次に揭ぐ。

歌の道をすてさせ給はず、絕えたるを興し給ひて、御政事しげき中にも、いつくしみの波を和歌の浦によせたまひ、めぐみのかげを大八洲におほひ給ふ。みこの宮にわたらせ給ひて、實算十年に一つあまらせ給ふ春より、內の御會に御詠を出さる。坊にても御會あり。御代になりて、なほなほ夜となく晝となく、雪月花の□よにつけて郭公をもてあそび、新樹の葉に御心をそめ給ふ。日日に十首の題めされて、御稽古ありしことなど思ひつづくるにも、忍ぶ昔になりぬ。內內の御法樂、御手向、御百首などはあまたたびなるべし。理世撫民の御心ばかしこくもうけたまひ、延享元年の春までに御傳授の事どもありて、五月七日に御灌頂の儀とげさせたまひ、天和の御例にまかせられて竟宴を行はれ、諸社の御奉納あまたところなり。

勅題を出されしも度度なり。おりゐさせ給ひて、月月兩社の御奉納、靈元院の御例を思召したまふ。臣かしこくも、受禪の朝より昇遐の夕まで、道につかへたてまつり御會の事題中沙汰うけたまはりて、うつし侍る御製をさらに書きぬき、四季戀雜にわけ、題の次第をたてて一帖になしぬ。桃葉御集芳雲表題など仰をうけたまはりて、部をわけ題の次第を御前にてかきつられし事も、あはれつたなき筆のおそれもあれど、御惠を思ひ、深きをしたひ、金玉の光をせばき袖につつまんとて、三年の御忌をむかふる日、夏のはじめやうやうにかきつられ侍る。

櫻中納言藤原爲村謹言

坊中御會和歌は、櫻町天皇のいまだ東宮におはせる享保十四年五月より同二十年二月にいたる、七年間の坊中御會によませ給へるものにして、二百三首を數ふ。御百首は家仁親王、職仁親王、光榮、公福、爲村等十四人と共に詠ぜさせ給へるもの、御著到百首は寛保三年五月五日より八月二十一日にわたりてよませ給へるものにして、其原本はいづれも圖書寮に藏す。櫻町院御集拾遺には、本書に收めたる御集に載せずして、專ら他の異本にのみ見えたるものを輯錄せり。

桃園天皇御製は圖書寮所藏の公宴御會和歌、禁裏御會和歌、寛延元年八月十三日御點取和歌等の諸本より採錄せるものにして、寛延元年六月(卽位の翌年)より寶曆十二年七月(崩御の御年)にいたる十五年間の御製三百六十餘首を收む。御著到百首は寶曆十一年の三月より六月十五日にわたりて詠ませたまへる御製にして、其原本また圖書寮に藏す。

大正五年十月

古谷知新謹識

御製集第十卷目錄

仙洞御百首 中院通茂公點……一
靈元天皇名所百首 享保十七年……一九
靈元天皇法華經二十八品和歌……三七
靈元院御集拾遺……四七
東山天皇御製……八九
中御門天皇御製……一三
櫻町院御集……一三三—二三六
春……一三
夏……一三一
秋……一六一
詠月和歌十五首……一八一

冬……一八五
戀……一九六
雜……二一三
櫻町天皇坊中御會和歌……二二七——二六〇
享保十四年御製……二二七
享保十五年御製……二二三
享保十六年御製……二四一
享保十七年御製……二四六
享保十八年御製……二四九
享保十九年御製……二五二
享保二十年御製……二五九
櫻町天皇御百首和歌……二六一
櫻町天皇御著到百首寛保三年……二七九
櫻町院御集拾遺……二九七

桃園天皇御製……三三九——三六八
寛延元年御製……三三九
寛延二年御製……三三〇
寛延三年御製……三三五
寛延四年(寶暦元年)御製……三三六
寶暦二年御製……三三八
寶暦三年御製……三四一
寶暦四年御製……三四四
寶暦五年御製……三四八
寶暦六年御製……三五三
寶暦七年御製……三五六
寶暦八年御製……三五一
寶暦九年御製……三五四
寶暦十年御製……三五九

御製集第十卷　目錄

寶暦十一年御製……三六

寶暦十二年御製……三六

桃園天皇御著到百首　寶暦十一年……三九

御製集第十卷目錄終

御製集第十卷

仙洞御百首

中院通茂公點

春二十首

山早春

朝な朝な霞むそなたの日かげにも春のこえける山は見ゆらむ

子日友

ひきつれて契る子の日の今日の友いく春野邊の松はつげまし

海上晩霞

仙洞御百首

海點ひろくみつ潮ぐもりそのままに暮るる夕やかすみなるらむ

舊巢鶯

まだきより鳴きてや谷のふるすとも人にふるさぬ雛のうぐひす

尋若菜

いづくにか摘みて歸らむ春日野の野守もつげぬ今日の若菜を

松殘雪

春日さす軒端に見れば松のゆきの消えあへぬいろも暖げにて

梅香留袖

身點にそへて寐なむもうれし眺めつつ暮せるよひの袖の梅が香

橋邊柳

道點のべや渡る小川の橋の上もなかばはおなじあをやぎのかげ

幽栖春月

月だにもすむ影みせず霞む夜を身のなぐさめの淺茅生のおく

野春雨

日かずふる野はみどりにて若草のつまあらはなる衣はるさめ

春曙雁

わすれめや雲路の雁のなごりまで眺めおきぬる春のあけぼの

花始開

色點も香もなべてにはあらず植ゑしより待たれて咲ける庭の初花

靜見花

つくづくと眺めくらして今日はなほ心のかぎり花にそめつつ

依花待人

訪點はるべき花のやどとは頼まぬもあたら色香に人ぞ待たるる

老年花霧中看(イ)
花慰老

霧點の中にありと見るてふ老らくも心やはなにならでわかれぬ

落花隨風

散りぬるを恨みむ花の行方だに知らばや風のやどりならでも

雲雀落

それと見ぬかすみのうちに落ちくるも聲に知らるる夕雲雀哉

水邊苗代

せく水のたよりもちかき川邊にやまづ苗代のたねはまくらむ

欵冬露

やまぶきの露かかりけるゆふばえは何によそへむ匂ともなし

暮春藤

行く春を今いくかとも知らで見む花はさかりの藤のしたかげ

夏十五首

新樹風

花に風いとひし春のこころをもかへて若葉のうへにこそ待て

里卯花

玉川のかきねつづきは咲きみちてその里しるき卯の花のころ

杜郭公

聞く人もありと知らずや時鳥しのぶのもりの今朝のはつ音は

郭公何方

ほととぎす思ひもあへぬ一聲をあやしや雲のいづこなるらむ

池菖蒲

刈りふくもものの汀にかげや見む池にのぞめる軒のあやめは

對橘問昔

しのべとて誰が袖ふれし橘のかくのみ世世をにほひきぬらむ

五月雨晴

六月の照る日をあかみいつかはと見し五月雨の雲も晴れぬる

嶺照射

點狩人のともす火串を嶺に生ふるまつとも知らで鹿やよるらむ

庭夏草

點秋まちて花みむほどの種もあらじ植ゑぬにしげる庭の草葉は

隣蚊遣火

夕けぶり立つるそなたの軒端よりまづ靡ききてすだく蚊の聲

夏月易明

點すずしさもただ時の間の端居していくたびあけぬ夏の夜の月

螢似玉

よそにもや袖の中なる玉と見む包むに飽かぬ夜のほたるは

遠夕立

山よりもあなたに過ぎて鳴神のこゑさへ聞かぬ夕だちのそら

樹陰蟬

身をかへし陰にややがて鳴く蟬のこゑ聞きそむる森の木深さ

納涼忘夏

點秋とこそいはがき水のおばしまに夜まであかず涼むころかな

秋二十首

浦初秋

須磨の浦や身にしむいろの初風も關ふきこえて秋は來にけり

七夕別

點人の上のなごりにや似ぬ天の河としのわたりは遠きわかれも

荻聲驚夢

見し夢のまくらをもとの憂き秋にかへすや風の下をぎのこゑ

萩移水

點花のいろ枝のさまをもうつしとる影やよどむ瀬はぎのした水

薄似袖

點まねくにもとまらぬ誰れを道のべに暮ふ尾花が袖のつゆけき

雲間初雁

そなたぞと聞けば見そむる夕暮の雲間もうれし渡るかりがね

田家鹿

點ひだの音も馴れぬる小田の小男鹿をもる庵近く來つつ鳴くらむ

露庭蟲

點草の原たれとへとてかおき埋む露のした葉にまつむしの鳴く

故郷秋夕

點おもひやる袖さへぬれて涙のみふるさと人のあきのゆふぐれ

對山待月

點暮るる夜は山をぞかこつ月をうきころともわかぬ心いられに

江月冷

點霜おかぬ蘆邊も月のしたかせにまづいろかはる難波江のあき

月催涙

月影にいざなはれてや落つるともおぼえぬ露の袖ぬらすらむ

秋月添光

點秋をしもいかなる時とたぐひなきひかりを空に月はすむらむ

獨惜月

更けゆくを獨がためにをしむかな人は寐し夜の月におきゐて

近擣衣

小夜衣うちもたゆまぬ聲聲にいねがてなれや小いへならびは

霧隔舟

點霧のうちにまきのを山はなほ見えて行方ぞ知らぬ宇治の河舟

澤畔鳴

點おのがすむ心がらにや憂きかずを澤にかぞふる鳴のはねがき

菊久盛

草も木もうつろひかはる露霜のあきをときはに匂ふきくかな

岡紅葉

折りとれば散りぬる枝のもみぢ葉や拾ふゆききの岡のべの袖

暮秋紅葉

また來むも遠山姫のあかずとや染めしこずゑの秋のくれがた

冬十五首

朝時雨

吹きおくるあらしの雲間さだまらでまだきしぐるる朝日影哉

落葉有聲

枝ながら折れぬばかりの音たてて木の葉吹きまく風の烈しさ

竹間霜

うつりくる軒の日影を待つほどや猶霜さやぐいささむらたけ

寒村處處

ここかしこまづ霜がるる野邊の色や秋の露にも染めし淺茅生

湊寒蘆

みなと風やがて吹きしく下折に枯れたつ蘆は見るほどもなし

懸樋氷

住むいほは懸樋の水のおとづれも絶えはてぬとや氷とづらむ

冬月冴

更けゆけば空にみちぬる霜もあれや光もしろきふゆの夜の月

曉聞千鳥

あかつきやおのがきぬぎぬ鳴海潟さらに千鳥の鳴く音侘しき

河水鳥

山かげは人もかよはぬ河邊とやみなれそなれて遊ぶをしかも

關路雪

關の戸の明くるひかりは急げども行けばみちなき今朝の白雪

雪中眺望

駒とめて向ふや飽かぬ晴るる日の雪見むとても出でぬ野山に

夕鷹狩

歸るさは片野の狩場くれにけり酌むさかづきの影も添ふまで

炭竈煙

山とほみ侘びてもすめば炭竈のけぶりに見する賤がいとなみ

爐火閑談

埋火のもと聞き見てし世語に飽かぬまとゐの夜ぞふけにける

年欲暮

昨日今日あすかの河のとばかりに越す年波のはや瀨をぞ思ふ

戀十五首

忍涙戀

袖のうへにかけて見すなよ心こそいくたびしぼる涙なりとも

傳聞戀

かたりつる人さへ今は睦しみおなじことをもまたぞ問ひ聞く

纔見戀

似げなくて思ひかけぬも玉だれの隙間に見しや忘れざりけむ

祈難逢戀

おりたちて年月いのるしるしをもいつみわ河の逢瀨ならまし

契經年戀

つひにとは契りし人のこころをも今はうたがふ月日經にけり

待空戀

待ちよわる今宵の袖のけしきをも思ひおこさで人は寐ぬらむ

來不留戀

誰れをとふたより聞きてか唐衣こころもとめず立ち歸りけむ

返玉章戀

人はかく見もせで返す玉章をふたたびおのが手にとるもうし

逢不逢戀

一夜みし情もあやし憂きものとまたなりはつる人におもへば

尋在所戀

わが爲によも杉たてる門はあらじ知らぬ在所をいかに尋ねむ

欲顯戀

一人二人えさらで知るも浮名よるこれよりやがていひや騷がむ

恥身戀

夜とのみいはずや人に見えまうき身の有樣をかつは知るにも

難忘戀

忘れぬは我れのみ生けるかぎりにて思へばつらきよその年月

留形見戀

逢ふ迄はこれをだにとて出でし世に面影ながら形見なれとや

恨絶戀

とてもかく絶えなばいはじ憂きふしを思ひし儘に何恨みけむ

雜十五首

寐覺鷄

やどり鳴く曉ごとの鳥が音もまたをりをりのねざめにぞ聞く

古寺鐘

住む寺のあたりしづかに一夏をこもるはやしの鐘はこゑして

閑中燈

さびしさも知らぬすさびに幾夜をか書みてふかす燈火のもと

薄暮松風

身にしめて聞く宿がらの松風やさらにゆふべの軒のつまなる

巖頭苔

點むす苔の根ざしはあさき岩の上にいかで世世經る緑なるらむ

蘆間鶴

點見るがうちに隱れあらはれあさりして蘆邊を傳ふたづの村鳥

澗戸雲鎖

さすとなき谷のとぼそを暮るる夜は心ありても雲やおほへる

樵路雨

點降る雨にぬるるかへさや山人のおもきをいとふ眞柴なるらむ

杣川筏

落ちたぎつ流るるみをの杣川になれしわざとや下すいかだし

山家送年

點春秋とゆくにまかせて山ずみのかぞへも知らぬ年やいくとせ

羈中憶都

名のみして答へぬ鳥のすみだ河いとどみやこは戀ひ勝らめや

旅泊波

點いかに寐む夜みつしほのいやましに浮きてたゆたふ波の枕は

往事如夢

過ぎゆけばみな何事も夢の世にさこそはあらめ今のうつつも

述懷多

拙さの見えてうきをばおもふかな百の言葉のひとつひとつに

寄神祇祝

點たのもしな三種の寶すべらぎに授けてまもるかみのちかひは

育墨五十二首

かずかずにみがける玉やけがれましかけてかひなき波の藻屑は

正二位通茂上

靈元天皇　名所百首

享保十七年自二月上旬至三月下旬

春二十首

音羽川

こほりゐし波も（以下闕）

玉島川

少女子が住むらむ里やいづくぞと玉しま川のかすむみなかみ

高砂

ながき日はまだ高砂の尾上より待たれてかすむ鐘のひとこゑ

春日野

名にしおふ山よりつづく若草のみどりに萌ゆる春日野のはら

三輪山

ゆき埋むこずゑもはやくみどりにて春のしるしを三輪の杉村

葛城山

世に似ずや花もやなぎも佐保姫のかつらぎ山の春のさかりは

手向山

若葉さへまだしき春のたむけやま紅葉のあきや神も待つらむ

伊勢海

のどかにも吹く神風の伊勢の海にながき日ぐらし貝や拾はむ

志賀浦

志賀の浦や見おくるすゑの行く雁は翅にまがふ沖のささなみ

三島江

つのぐむを見しや幾日のあし邊とて緑をひたす三島江のかせ

鹽竈浦

漕ぐ舟もいづくはあれどいつはあれど春のあけぼの鹽竈の浦

宇津山

蔦かへで落葉のままに春はまた道せばかりし宇津のやまごえ

葦屋里

このほどは葦屋の蜑もいさりせで我が住む里の花や見るらむ

吹上濱

花にうき吹上のはまの春風も散りしくときはゆるしてや見む

由良御崎

ゆくへなくかすむ波路やたどるらむ由良の御崎のはるの舟人

忍山

岩躑躅いはぬ思もいろにいでて名のみしのぶの山に咲くなり

水無瀬川

水無瀬川その世のはるの面影もありて行くせに月やかすめる

田子浦

名に高き田子の浦波わがものとかざしも折らで蟹や見るらむ

大淀浦

おほよどの波ものどけき春の日に何をうらみて歸るかりがね

末松山

あらたまの年波こえてこし春もいまは日數のするのまつやま

夏十首

大井川

夏ごろもたためるいろを大井川ゐせきに白く見するなみかな

信太杜

千枝ごとに聞くともあかじ時鳥しばし信太のもりにやすらへ

猪名野

かげやどす露もおきあへぬ夏狩のゐなの小篠のみじか夜の月

御裳濯河

世にいとふ夏も知らでや神風のみもすそ河はきよくすずしき

伊香保沼

この頃の菖蒲に薫る伊香保風しらぬも知れと吹かぬ日ぞなき

天香久山

さみだれの雲のころもで峰はれていつよりほさむ天の香久山

大江山

わけゆかば道こそあらめ大江やま生野の草はなつふかくとも

難波江

ひかりある玉藻とや見む難波江の蘆の下根にすがるほたるは

美豆御牧

行く人のしろきを見ても花の名はとはぬ美豆野に咲ける夕顔

松浦山

いま來むも西こそ秋とまつら山ゆふべに夏のなにのこるらむ

秋二十首

初瀨山

吹くかせに音かはりける初瀨山ひはらは秋のいろわかねども

龍田山

いつしかと朝夕霧の立田山いまいくかありて木木は染むらむ

須磨浦

音たてて關ふき越ゆるゆふべより秋は身にしむ須磨のうら風

宮城野

宮城野の木の下露も心あれなもとあらの小萩うつろはぬまは

水莖岡

いもとねし秋のあさけは葛の葉のうらみもあらじ水莖のをか

小倉山

鳴く鹿のたちども暮れて小倉山さぞつまごひの道まどふらし

宇治川

今朝見ずば宇治の柴舟ここかしこいざよひかはる波のうき霧

常磐山

秋ふかき常磐のもりのしづくにもした草のみや色かはるらむ

三室山

いく秋をよそにへだてて神垣のみむろのさかき色もかはらぬ

高圓山

たかまとの秋やむかしの風ならでわくる袖なき野路のしの原

生駒山

つねよりも曇りみ晴れみ生駒山ふゆ待ちあへず今朝はしぐれて

生田池

とはましといひけむ杜のあき風を生田の池に見するささなみ

清見關

きよみ潟かげはとどむる月もやや明くるなごりやなみの關守

武藏野

いく千里なびく尾花ぞわけ出づる月のこなたの武藏野のはら

伊吹山

月のゆく雲にぞ遠きあらし吹くいぶきの高嶺くもはらへども

更科里

これもまたなぐさめかねて憂き秋のゆふべさらなる更科の里

白河關

たび人や紅葉を見てもふるさとのみやこの秋をしらかはの關

野島崎

影よわき野島が崎の秋の日に海人のころもでほし侘ぶるころ

明石浦

みるめなき妻やうらみてあかし潟なみのよるよる牡鹿なく聲

阿武隈河

年なみのたちかへりては阿武隈に秋をやらじとせく水もなし

冬十首

清瀧川

ふゆ來ぬと山分衣おりそへていまはた誰れかきよたきのみづ

小鹽山

年たかきこずゑによばふ蔭も見む小鹽の小松しもをかさねて

住吉浦

なほのこる菊もあき見し色ならでかりがね寒きすみよしの浦

交野

むかしこそ今はかた野の御狩場に聞くも錦のはをちらすらむ

田蓑島

なれもなほ田簑の島に頼みてや時雨にきつつ田鶴の鳴くらむ

有乳山

矢田の野のあらしやしのぶ山かせの音もあらちの麓ゆくそで

浮島原

かぎくらし降りもたまらぬ波のうへに雪ひとむらは浮島が原

安達原

降りつもる雪わけ迷ふみちのくの安達がはらにとふ宿もがな

因幡山

影寒く出でていなばの嶺に生ふるまつともなしや冬の夜の月

鏡山

かがみ山やつるる老の影もなほ添ひてやそぢに越ゆる年なみ

戀二十首

伏見山

住む里もへだつるなかに吳竹のふしみてふ名を思ふはかなさ

霞浦

海人ならぬ袖をぞぬらすほのかなる霞の浦のみるめばかりに

石瀬杜

むかひてはえも語らはで人傳にいはせの杜の名をたのみつつ

筑波山

心をぞつくばの山にとし經ぬるこのもかのもの蔭によりても

釉浦

濡れそひて後ぞしられし蜑ならぬ釉の浦なみかくるものとは

益田池

うき思益田は人のつらき世に生ける我が身の名にこそありけれ

高師濱

こころこそ高師の濱のあだし波かけておよばぬ人こふる身は

阿波手杜

うしや身は遂に阿波手の杜の名をもらすばかりの契なりけむ

志加須賀渡

ひと心かはすぞたのみ志加須賀のわたりはてずばあかじ行末

濱名橋

わたしえぬ濱名の橋のはし柱おもひ朽ちなむためしまで憂き

磯間浦

うらめしな磯間の蜑のいさり火のほのかに見つる契ばかりは

守山

いろかはる涙もいまはもる山の木の葉よりけに袖や染めまし

佐野舟橋

わが中は誰がさくるともとにかくに通ひて行かむ佐野の舟橋

安積沼

世の人はなべてこころの花がつみ安積の沼のたぐひにや思ふ

松島

逢ふことをいひもかはして松島の波にいつまで袖ぬらすべき

緒斷橋

あらずなる行方いかにとしら波の緒斷の橋のかけしちぎりは

三熊野浦

我がなかは憂き濱ゆふのいく百重へだてごころを三熊野の浦

鳴海浦

われぞ今はおほよそ人になるみ潟なみの心はあともとまらで

二見浦

ひと心ふたみの浦のかひなるも知らでぞ波の身をくだきける

名取川

いひさわぐ世に通るべき名取がは瀬瀬の埋木身は朽ちぬとも

雜二十首

芳野川

芳野川よく見て清きこころをば知れかし花のをりならずとも

鈴鹿川

鈴鹿がは八十ま近くなれるをぞふりぬる身にも更におどろく

不盡山

いかなれや繪にかく筆のおよばずと昔の人もいひし不盡の根

還山

ふるさとを思ひこしぢの旅人はかへるの山の名をたのむらし

天橋立

はしだてや上りての世は天人のここにみるめをめで渡りけむ

飛鳥川

淵瀬ある世にながらへて飛鳥がは身はいたづらにおくる年月

鳥羽

ありし世の鳥羽山松は朽ちぬらむその二度の名はのこせども

辰市

うる道のありてこそ身を辰の市にさわぐな心ことにふれても

吹飯浦

おのが妻口口夜ふけひの恨をや月にかこちて口口の鳴くらむ

布引瀧

千尋とかいはかさなれる嶺よりも落ちて名だかき布引のたき

長柄橋

朽ちせぬは橋の名のみぞなす事のなくて長柄の身には留めじ

玉川里

住む人のこころにみがく光あらば名におふべきを玉川のさと

生浦

花に咲き實になる秋を見むことや誰れもかたみのおふの浦梨

小夜中山

みやこ人ねぬらむいまを旅にては夢よりのちの佐夜のなか山

嵯峨野

嵯峨野わけ花も紅葉もいかで見む千代ふる道の跡はある世に

隅田河

みやこどり今もありてやすみだ河いざ言とはむ渡るふなびと

飾磨市

つねにただ爭ひたつや市びとの飾磨のかちに染むるこころは

和歌浦

至りえぬ和歌の浦路にかきつめて見る詮もなき藻屑ならずや

逢坂山

三つのせきかためぬ世には逢坂の杉のしたゆく道ひろくして

三津濱

百のかずみつの濱松見るべくもあらぬ老木の□□□ながらに

靈元天皇 法華經二十八品和歌

序品

聞きて知る人もむかしやともに見し御法の庭のはなのふる里

むかし見しよつの花ぶさ散りそめて時ある春の色香をぞ待つ

今もそのひかりあまねくてらすより法の花咲く時や知るらむ

方便品

山の名のいはでやみなばいかにして今もわけいる道は殘らむ

これぞこの常なるものを世の中はうつりかはると何思ふらむ

道しるべなくては人のいりがたき御法の門をひらくかしこさ

譬喩品

わが心みつの車にひかれしものりしてのちはうしとなりける

をしへずは牛の車のわれやなほおもひの宅を出でがてにせむ
ほどほどの御法をみつに説く法や世にありとある人の垂乳根

信解品

人の親の子はすてざりし心をも年へてこそはおもひあはすれ
かりなるも知らでいくとせふる里を忘るる草の庵に住みけむ
わづかなる求のみしてあはれびを受くるこの身と知らぬ愚さ

藥草喩品

見ずやこの野邊は數なき草も木もひとつに注ぐ雨のめぐみを
草も木も隔てぬ雨のめぐみをも受けてぞおのが上にわきける
説く御法ききえてこそは皆人のこの世も後の世をもたのまめ

授記品

冬枯のこずゑものちの春待ちて花咲くかげと聞くぞうれしき
きのふまで折ることかたく見し花をうれしくゆるす春の山寺

かしこしな道さまたげをなす鬼もかへりて法をまもる御園は

化城喩品

かしこしなあらぬ所につくり出でて疲れやすみしかりの臺も
それとのみ思ひし宿もかりねにて遠ざかりけりなもとの都は
思へども行末とほきなか道にしらずやすらふやどもうれしき

五百弟子品

かかりける衣の玉のひかりをも知らで惑ひしゑひの身ぞうき
傳へよといひし御法や今日の會にあひ見ぬ人も聞きて嬉しき
わがものと知らざりけりな陰おほき衣のうらの玉を見ぬまに

人記品

今朝かすむみつの濱邊ののどけさはおなじ難波の春ぞ隔てぬ
わがねがひみちぬる時もいたりぬと人ののぞみに今任すらし
多く聞くことを願へる人やなほともにいたらむ道におくれじ

法師品

うとからず誰れもことへ法の師はたのむ佛の道のしるべに
山ふかみ人はこゑせぬ窓ふけて世に似ぬ月のかげぞさしいる
わけいればしめる山路に谷水のやや近くなるほども知りけり

寶塔品

昔せしちかひのままにあらはれて告げし詞もまたたぐひなき
いにしへの佛もここに聲そへてちかひし法のまことをぞ聞く
ならべ見し光やいかに又たぐひなかばをわくる蓮のうてなに

提婆品

いでや身にかへてと思ふ道のため菜摘み水汲み年もつみけり
ささげつる玉の光もあらはれていまぞみなみにめぐる月かげ
さはりある身を目の前にかへてこそとほき南の空にゆきけれ

勸持品

あま衣へだてぬものを人なみの數にもれしとなにうらみけむ
わたし舟われをばひとり殘すやと思ひしなみに浮び出でぬる
うしと見し月に心をなぐさめてをばすてならぬ秋や知るらむ

安樂行品

よきあしき世にしたしまぬ身ならずばやすく樂む道は知られじ
さとりえし後こそ夢もあだならね御法の華をおもひ寐にして
おのづから夢も妙なることわざを見るやみ法の華のしたふし

涌出品

かず知らぬ池のはちすの中になほ四本の花やわきてことなる
池水のうきに染まぬやいかばかり妙なる法のはちすなるらむ
法のにはほどもなかばをくらすかと思ふが中や幾世なりけむ

壽量品

はかりなき命と說ける御法をぞこの世のほかの身には頼まむ

つねにすむ月をためしにいくめぐりむかへむ秋も限知られぬ
かげとめていりぬと見しは空目にてつねに月すむ鷲の山の端

分別功德品

まことある心ひとつにむかはめや千千の勤に身をつくすとも
わが命つひにはてなきことわりをうれしと聞くも法の外かは
かぎりなき命をたれも得てしがな御法の末を世に說かむため

隨喜功德品

鷲の山みねの松風さととほく吹きつたふるもふかきはなの香
磯づたひきてもにごらぬ法の水そのみな上のさこそ澄むらむ
法の水そのみなかみのさぞなとはとほき流を汲みてこそ知れ

法師功德品

うつし見るかがみを思へ世の中にありとあるものの色も形も
さらに今てらすももとのひかりにて心の月はわれのみぞ知る
ますかがみちりにけがれぬたぐひ知れおなじ人とは生れくる身も

不輕品

知らざりき動かぬ岸をうつ浪のそれもかへりてえにしなりせば
人の身はやがてそなはる佛あればたれをかろめむ物としもなし
するつひにみな佛ぞとなべて世の人をばつねにひろめたりけむ

神力品

はかりなき神の力を見るままに誰れもほとけの御名稱へつつ
のりの花口口きて殘るやどもがな咲きしところの春や隔てぬ
いろいろにてらす光のほかにまた二つのころを遠く聞くらむ

囑累品

三たびしもいひて授けし言の葉の末とほりぬる法のかしこさ
末の世の人も聞けとやいただきを撫でて讓りし御法なるらむ
世にひろく傳へて聞けとかしこくも惜まざりける法の言の葉

藥王品

ともす火の跡をとどめぬ身はつひにそはむひかりの疑もなし

あまた說く中にも今の御法こそうへなきすみのやまと言の葉

このみのりたもつしるしは手弱女の蓮のなかに生るとぞ聞く

妙音品

これやその妙なる聲を大空もうたぬつづみのひびきなるらむ

むかしせしむくいうれしく絲竹の妙なる聲ぞ身にはそひける

おそろしき道さまざまにゆく身をもすくふは深き惠とを知れ

普門品

なほたのめ三十あまりに身をかへてさしもあまねく惠む誓を

さまざまに姿をかへて說く法のありとある世の人のためなる

十あまりここに身をとく法のあまねきめぐみ誰れをもらさむ

陀羅尼品

しきしまの道にかはらじ鬼神もあはれと聞きし法のことの葉

一言をたもてるひとのうれしきは身も衰へず世をもうれへず

夢の中もなやまさじてふ誓こそたもてる法のまもりなりけれ

嚴王品

更にこの二木を道のしるべにて門と見し山にたづねいるひと

子を思ふ道より道にさそひしもなれぬる山の友にやはあらぬ

あはれ知る浮木の龜のたぐひにて逢ふこと難き御法なりせば

勸發品

のこしおく四つの敎に五百歲のちまでおよぶ御法なるらむ

鷲の山ちとせの松の花のかげ立つことかたき今日のかへるさ

說きおける御法の庭のなごりあれや門とぢし人のかへる夕暮

靈元院御集拾遺

立春朝　千首和歌

なべて世にみつの朝ののどけさも今日色そふる春はきにけり

本院七十御賀御屏風　野邊小松原に子日する

ところ　御集一本

初子の日まれの玉の緒野邊に出でて今は千年を待つ事にせよ

ななそぢの齡を野邊に子の日して今年くははる千代の影かも

いくたびのためしにひかむ小松原末遠き野の今日の子の日を

野霞　千首和歌

野は春とかすみにけりなうちわたす遠方びとの袖まがふまで

田若菜　同

靈元院御集拾遺

若菜摘む幾里人のおりたつや田の面にぎはふはじめなるらむ

簷梅 千首和歌

梅の花あくまで袖ににほへとや今日は軒吹くはるかぜもなし(なき イ)

さいつころ關白のもとに紅梅の枝をおくり侍りしにその花おもしろくて卽興などありしよし後にあひ侍りしとき物語ありてその歌のことなどものがたりありしほどに返歌として 延寶九年御集一本

手折りしは色なき梅のひと枝やこのことの葉の花にけたれむ

夕春雨 千首和歌

暮るるかと見えてなかなか菅の根のながきをそふる春雨の空

春山 同

目もはるの色に染めなすこころもて向ふ我れさへゑめる山眉

杜花 同

櫻がりいくたび雨をとどむらむ花のかげゆくもりのしたみち

花根 同

花も根(は イ)に歸らむことを急がずば家路わするる日をやへなましゝ

元祿三年正月のするつかた一乘院宮の南都へ歸寺ありし前夜來臨ありて酒宴し侍りしとき

またはいつ頃か上京あるべきぞと問ひしかば三月牡丹の頃花見にのぼるべきよしありし二月の四日文のついでにひと日盃酒のこと悅びおもひ給ふるよし詩をつくりておくられし和韻に 御集一本

待てといひし君が言葉の花ゆゑに彌生をいそぐわがやどの春

三月十四日池のほとりに遊覽のをりふし一乘院宮卽興の詩ありその和韻に 同

靈元院御集拾遺

まれにきてみやこの春を見る人や花に棹さすいけのそほぶね

延寶八年彌生のなかの六日中院前大納言きの
ふ東山にまかりて手折りつるとて櫻の枝をお
こせ侍りて「手折りつるこころの色はあさけれ
ど誰れにか見せむ花の一枝」とありける返しに
よみてつかはせし（御集一本）

あさからぬ言葉のつゆの色香をも誰れかは見せむ花のひと枝

二月二十六日南殿の櫻さかりなるよしなれば
花見むとて内へみゆきありし道に家家の花ど
も御覽ずるに兵部卿宮の庭のこずゑさかりに
見えけるほどに内より花の枝をこひにつかは
されしにそへられし（同）

よそに見て過ぎうかりつる心をも知らずやいかに花のあるじは

いにし年の春わづらふこと侍りて待ちしさく
らも心もとなくおぼえ侍りしにくまがへとい
ふ櫻のいとおもしろく咲き出でたるを舟に植
ゑて園亞相の見せて侍りしその木に今年も初
花の咲きいで侍りしほどに一枝折りて園亞相
のもとにおくり侍りしついでに（延寶八年御集一本）

たれこめし昨日の春のいろかへてこの初花ぞまゆひらけたる

御かへし園亞相「君がため眉ひらけたる初花を
めぐみの露に見るぞかしこき」

享保三の年やよひなかばの頃より例ならずお
はしまして二十日あまり七日のつとめて右大
辨光榮がもとより白藤山吹海棠霧島またその

ほかえもいはぬくさぐさの花どもすずろにお
もしろくさかりなる枝どもを色のはえあるや
うに花瓶にさしてたてまつられ侍りしかばた
れこめにし心もなぐさめ悅にたへずしてとり
あへずいひつかはせし（御集一本）

佐保姫も眉ひらくべき春のはなの數をつくせる瓶のうちかな

梨花（千首和歌）

にほひある雪と見えつつ山梨のはな咲きうづむ枝おもげなる

留春不駐（三月盡イ）（同）

とどめ得ぬ春をいざなひ佐保姫のゆくらむ道にもる關もがな

餘花（同）

夏來ぬと待たれし風もおそ櫻はな見るほどはまたやいとはむ

享保十六年四月六日圓通寺に御幸ありけると

き松が崎山のつつじのさかりなるを見給ひて（元陵御記）

尾上までたたみあげたる岩がねに躑躅も花の咲きのぼりつつ

岡郭公（千首和歌）

鳴けや鳴け名だたる花もをりにあひて咲けるをかべの山郭公

橋五月雨（同）

山びとのかよひし道やさみだれに跡なきみねの雲のかけはし

夏月易明（同）

かささぎの聲だに聞かで明けにけり渡せる橋のみじか夜の月

浦螢（同）

こころなき螢は見ざらむ夜な夜なを浦のとまやにとぶ螢かな

初秋衣（同）

秋としもわかで聞きつる蟬の羽のよるのころもに初風ぞ吹く

七月四日一乘院宮より秋のしるし昨夜はじめ

靈元院御集拾遺

て鹿のこゑしつるよし申しける返事に 御集一本

三日月の秋ほのめかすゆふべをや身に沁みそめて鹿も鳴くらむ

夜露 千首和歌

白玉のひかりをかはす露ならば天つほしにやかずをくらべむ

女郎花靡風 同

いつの秋いかなる風に女郎花こころよわくてなびき初めけむ

徑蟲 同

踏みしだく露もいとはず行くかたに蟲の音つづく道のしば草

里鶉 同

住みすてし里はふかくさ秋を經ていとど鶉のとこやしむらむ

七月十五日本願寺僧正より水仙花をたてまつりしに 御集一本

冬だにも菊よりおそく咲く花をまだはつ秋のなかばにぞ見る

その座に韶光卿侍りて絶句つくりける和韻に 同

またたぐひなみをばしのぐ仙人に逢ひ見る今日や千代の初秋

かの良暹がいづくもおなじといひける秋の淋しさはげに此里のみの夕にはあらねどこころみがてら日毎に所をかへて閑寂を歴せむとおもひよりぬさるは寶永二の年中秋のことにな

む

十日今日はつねに住めるところより東なる書閣にありその前の庭をひろくつくりて芝草をおほしたりうゑ木などはるかに見る

はれやかにさすかた遠き夕日影こずゑにのこる秋のゆふぐれ

十一日今日は南の池のほとりにたたずめりなにとなくながむる空の雲間より月を見そむる秋のゆふぐれ

十二日北なる池の西に一宇の屋あり此所に日
ひと日居くらしてかへりぬ
いくたびか降り出でて晴るる村雨になほ雲まよふあきの夕暮
十三日つねに住むところの東につづきたる書
齋にながめくらす
降りしむる雨もしばしのあと晴れて名殘しづけきあきの夕暮
十四日北の池のほとりに南をとほく見やる
月にまで雲までおなじあはれさをながめてすてぬあきの夕暮
十五日名月をむかへむため高くつくれる樓に
のぼり東の山を望む
かげにほふ峯にこころをつくすかな最中の月の秋のゆふぐれ
十六日池のほとりの松かげなる小屋にしばし
膝をいる

軒ちかく松のかせのみ身にしみて月おそくなる秋のゆふぐれ
十七日池の東に水にのぞめる茅店あり此所に
ながめゐたる
こころをもうき世のほかになしはてつ萱が軒端のあきの夕暮
十八日常に住む軒端を見出すに比叡の山つづ
きもくもりて見えず何の興體もなし
あまもよの空ものすごき雲かせにながめもいれぬあきの夕暮
十九日おなじところよりつきたる廊のかたは
らなるせばき所にゐぬ
今日もまたこころゆくべき空ならでくもりふだがる秋の夕暮
二十日池のたつみなる山の上にいささかなる
臺ありおばしまより野山を見わたす
ながめやる野田はるばると山もとにつづく稲葉のあきの夕暮

二十一日いとよく晴れたり今日はひねもす庭に出でて山もとにのぼり所所の橋わたりなどして夕つかたは舟にのり中島をこぎまひて暮ちかくなるほどに南の入江によせぬをりをりそこなる一宇にいたりぬ

ここにきて見れば霧立つ池のおものながめはてなき秋の夕暮

かくのみ日をかさぬれば十二景になりぬされどやどを立ちいでぬながめは何ばかりのことかは歌はただその折の景趣をわすれじとばかりするほどに心もあさく言葉もつたなし人には見すべくもあらずやりすててむ 以上扶桑殘葉集

八月十四日の夜月のいとよく晴れて待れば明夜陰晴不可知といふ句をおぼし出でて此七文字を毎句のかしらにすゑてよませ給へる 御集一本

明（一首闕）

夜もすがらさやけき月に向ひても去年の櫻のおもひやはなき

陰るなよ名だたる秋のなかばにも月のさかりは一夜ふた夜を

晴るる夜の月のひかりをしるべにて千里のほかにゆく心かな

不二の嶺の雪もひかりや勝るらむ時知る月のあきのなかばは

可古のしま月に住むらむ田鶴が音も松原遠く聞くここちして

知（一首闕）

谷月 千首和歌

見つつゆくなかばの月の谷水におもかげうかぶもろこしの秋

渡月 同

いそぐなよみやこも近し渡船まだ月ふけぬ淀のかは瀬に

井月 千首和歌

草ふかくしげればやどる影ぞなき月のいつよりわすれ井の水

東山院東宮の御時八月十六日によべの月御覽じてよませたまひけるとて御覽にいれられし御歌のかへし 御集一本

あきらけきひかりを添へて君が見む雲居の月のあきもま近き

堯延法親王きのふ十三夜の佳作あり御物語のついで自書して御覽にいれらる其和韻に 同

名にめでて月の名殘に今宵さへをしと思ふ夜を見つつ明さむ

野草欲枯 千首和歌

うらがれは淺茅ばかりと見し野邊の草葉おしなみ色變りゆく

古寺紅葉 同

折りちらし色には染めぬこころをも雲の林のもみぢにや見し

享保九年八月二十六日山莊に御幸ありけるをり押小路三位のたてまつれる詩の和韻 御元陵記

をりごとにあかぬ野山の秋の色はいま幾度ののちもかぎらじ

享保十三年八月二十五日賀茂の社に御幸あり

けるをり 同

五十串をも河邊に立ててせし御禊いまもさこそと思ひしをはや

あるところより奥山のとて紅葉を一枝たてまつりしを 御集一本

染めつくすこの一枝の目うつしに露のはえなき庭のもみぢ葉

中院大納言秋のすゑつかた小倉山にて紅葉狩したるよしを申して色こき枝をたてまつるとて「小倉山むかし忘れぬいろを見ぬ御幸まちける嶺のもみぢ葉」とよみてたてまつりける御か

靈元院御集拾遺

へし（御集一本）

ひとたびは行きても見ばや御幸待つ色は昔のみねのもみぢ葉

やまと歌によみきたれる名所の紅葉を都のほかまで遠くもとめて色紙にうた（國文）さるることありしに立田山の紅葉を一乘院宮よりたてまつられし其枝をいささか瓶にさして中院前大納言に見せられし返事のうちに「いかに見む君がめぐみの露ふかく染めし立田の山のもみぢ葉」とありければ　同

立田姫もいかに見るらむ言の葉の露に染めます秋のちしほを

中院前大納言より鈴鹿山のもみぢをたてまつるとて「鈴鹿山そめてふりにしもみぢ葉も今日やかひある秋を知るらむ」とよみて短冊にかきて枝にむすびつけられたるに御かへし　同

こころざしそめて折りこし一枝やふりぬ鈴鹿の秋のもみぢ葉

須磨明石の紅葉をある人のたてまつりしにそれをいささかつつみて中院前大納言につかはさるとて　同

須磨明石浦づたひしてわくらはのたよりにたぐふ風の紅葉ば

眞敬法親王東山清閑寺といふところに紅葉見たまひて山山のこずゑおもしろく染めつくしたることを絶句につくりて一枝たてまつられしかば繼といふ字を韻にふみて御かへし　同

ひと枝の紅葉もおなじおもかげにこころを染めてむかふ山山

享保九年十月八日修學院山莊の紅葉見にまかれりける烏丸大納言より「わけこしもめぐみの

露の色深き山の紅葉をあだにやは見む」とよみて
たてまつりけるに御かへし 元陵御記
色ふかき言葉の露をかけてこそ山のもみぢも染めまさりけ(イ)め
おなじをり三條中納言より「いかに見むとしど
しごと(イ)に御幸して君が心をそむるもみぢ葉」と
よみてたてまつりけるに御かへし 同
見る人のこころ染めけるもみぢ葉は淺きも深き色となりけむ
またおなじをり武者小路三位より「御幸待つた
めとやわきて露霜もちしほ染めたる木木のも
みぢ葉」とよみてたてまつりけるに御かへし 同
昨日さへすくなき木木の遲紅葉ちらでやありけむ如何(ぞと(イ))とぞ思ふ
またおなじをり桑原前宰相より今日八日なれ
ば古今集七夕の歌に八日の日よめると詞書あ

る歌に「今日よりは今こむ年の昨日をぞ」といへ
るを思ひいでてよみ侍るとて「この山の紅葉も
さぞな今日よりはまた來む秋の御幸待つらし」
といふ歌をたてまつりければ「いつしかとのみ
待ちわたるべき」とある下の句の言葉にて御か
へし 同
紅葉ばもまたこむ秋をいつしかとめでし人ある今日よりや待つ
またおなじをり久しく所勞にて籠りゐたりけ
る武者小路前大納言の許より「ますかげもほか
にあらめや君が見しこのもかのもの山のもみ
ぢ葉」とよみてたてまつりければ五句のおきど
ころをかへずよみてつかはさる 同
ますかげもありとはいつか比べ見むこの山ならぬ山の紅葉ば

これならでほかにあらめやいく千入添ふる紅葉の大和言の葉

幾秋もわがたらちねの君が見したためしとてこそめづる紅葉ば

この秋は二度ゆきて我がやまのこの面かの面の紅葉をぞ見し

見せばやな深くも染めぬ木木ながら我が庵しむる山の紅葉ば

このたまはりつる御製を拜してまた武者小路

前大納言より「かぎりなく仰ぐ言葉の錦にはし

かじいづくの紅葉なりとも」「もみぢする秋の千

入の山よりも添ふるめぐみぞ深くかしこき」「御

代ながくありしためしともみぢ葉も君こむ秋

を千千代(イ)も染むらめ」「いくたびも御幸は待たむ春

秋の紅葉も花もあかぬまにまに」「千代かけてし

むる紅葉の山までもつかふる秋に逢ひ見てし

がな」と五首の歌よみてたてまつりければ 元陵御記

限なき秋の紅葉ばあと(ため)しあれば飽かぬまにまに千代も見てしが

神無月のはじめつかた園中院兩亞相これかれ

いざなひて清瀧にもみぢ見にまかりしよし申

してその夜折りてたてまつれる一枝にそへて

園亞相のよみてたてまつれる「君がため折れる

紅葉は谷水のうもれ木ならぬいろに出づらむ」

といへる歌の御かへし 御集一本

行きて見む我がためとてや谷水の心も知らで折れるもみぢ葉

おなじとき中院亞相のよみてたてまつれる「手

折りてはひと枝ながら清瀧の波をも染めし紅

葉とぞ見よ」といへる歌の御かへし 同

手折りつる枝のもみぢ葉きよたきの波に染めたる心をも見つ

十月十九日庭の紅葉のさかりなるゆふばえを

眞敬法親王見給ひてあくる朝せうびの一絶を

たてまつられし和韻に（御集一本）

庭に見る木木には知らぬ千入をもきみが言葉の露ぞ染めます

詔光卿菊の詩をつくられし誂韻にてなれる韻

脚陽場香粧霜の五字ありこれを五句にわかち

たまうて和せらる（同）

陽をへぬる場のしらぎく香をうすみ粧ひかへよおけるあさ霜

閨時雨（千首和歌）

まなく降る時雨にさめていくたびの夢もみじかきねやの手枕

田霜（同）

おき渡す田の面の霜の隈なれや刈らでわづかに殘るひつぢも

柏霰（同）

ここはなほ降る音たつる葉をしげみ霰はばしきかしは木の杜

社頭雪（同）

うづもれぬあけの玉垣はるばると雪をいろどる神のひろまへ

佛名（同）

聞えあぐる御名頼もしき聲のうちにむべ一年の罪もけぬべし

寄霞戀（同）

またいつの霞のまともたのまれず今はへだてて遠きおもかげ

寄湊戀（同）

たより聞くそでにもさわぐ涙かないなの湊の名のみきこえて

寄石戀（同）

くらぶるに千引の石もいかならむつらき心のうごきがたさは

寄窓戀（同）

わりなくぞなほ見まほしき人はまだ窓の中なる程と聞くにも

寄檜戀（同）

かざしをる袖にまがへて尋ぬとも人やはみわの檜原ならじを

寄水鶏戀 千首和歌

聞きわびぬ思ひたえては待たぬ夜の心も知らずたたく水鶏を

寄虎戀 同

分入りて逢はば虎住む深山ともいはじなとても戀死なむ身に(は)

寄促織戀 同

いく千機おる蟲としてか長き夜をひとりぬる身のもろ聲に鳴く

寄硯戀 同

硯にはかかじとおもへど戀ひわぶるをりは忘れてすさぶ手習

寄斧戀 同

わが戀の山路はとはじうきなげきこるてふ斧の音にたつとも

寄水雜 御集一本

舟をだに浮べぬ水もつひにその海に入りてはそこひ知られず

旅友 同

行きつれて頼めば人も頼みけりあはれおほかるたびの道かな

山居臥雲 同

山とほく行くも歸るもこころなき雲にまかする窓のあけくれ

曉鶏 同

寐覺して聞かずば見ずばあたら夜のありあけの月に鳥の初聲

熊 同

荒熊の住めるうつぼ木をとめ子にゆづる情は知るもあはれさ

寄衣雜 同

寒からむ民をあはれむ小夜衣かさねぬめぐみ身にはおほひて

岡椎 千首和歌

かち人やたのむ蔭なる椎がもとしげる岡邊にやすらひて行く

名所路 同

つたかへで落葉よきては行くべくもあらしよ(に(イ))細き宇津の山路
　　羈中嶋　千首和歌

波間より見えしやいづれ沖つぶねゆく手にちかくむかふ嶋嶋
　　山家春　同

花鳥のはるはいたらぬ山里につつじさわらびをり知らせつつ
　　田家雲　同

民の戸の年あるしるしをりをりの雲もあらはす時やたのしき
　　老後懷舊　同

老いていま悔の八千度なげくぞよ佛のみちにうとかりし身を
　　寄關述懷　同

思へども道さまたげのことしげみ(き(イ))浮世の關をいでがてにして
　　大原野　同

幾世へぬ花(西(イ))のみやこのむかしより大原野邊にあふぐみやゐは
　　如是作　同

秋まちて花はさまざま見る菊もいま蒔く種のほかにやは咲く
　　寄星祝　同

をさまれる世を知らせてぞことぶきの星も南の空にかがやく
　　延寶三年後水尾院試筆御製御和　正月元日御集一本

仙人のいのちながさをためしにて八十の春やももかへり經む
　　この春は千とせのためしはじめおきて經ぬべき君が命長さよ
　　十月十四日おなじ院の八十の御算を賀せしめ給ひしとき御うしろの屏風に霞を　一御集本

春がすみゆたかにたてる袂にもつつむにあまる千代の色かな
　　おきつ波八千代をかけて八十島のかすむみるめもあかぬ春哉
　　その日しろがねの竹の御杖につけてたてまつり給ひし　同

君が手に今日とる竹の千代の坂こえて嬉しきゆくすゑも見む

辛酉の改元定ありて天和にさだめし朝いとの

どかなれば（延寶九年御集一本）

今日にあけてまづのどかなる光より空も和ぐときはしるしも

二月九日數代中絶したる立坊のこと沙汰せしに節會の儀式よりはじめことのさはりなく遂げおこなひぬることを悅びおもひて（天和三年御集一本）

時しありて絶えたるをつぐこの春のわが嬉しさぞ身に餘りぬる

中院通茂の詠百首和歌に點あそばされけるをりその奥にかきつけさせ給ひける（中院通茂公詠草）

思ふぞよ年ふる浦の松が枝におよばぬなみのかけしちぎりを

明年位讓るべき年の師走十日あまり四といふ夜內侍所にて神樂を聽聞せしに年比內陣にて聞き馴れ侍るものの音明年よりはほかざまにて聞き侍るべきよと思へば今更に神の御前ならぬ

ごりをしく侍るは神慮もへだてなきやうにおぼえしまことにかしこきことと感涙をさへおしのごひて（扶桑雜集）

忘れじとおもふこよひのものの音ももろ心にや神も聞くらむ

かくいへど年比のねがひ今こむ春はみちぬべきこと春宮のふかく神慮にかけられ給へることどもをおもひつづけていよいよ天津日嗣の行末天地とともにかぎりなからむ事を祈り申すにいにしへの神勅いとたのもしく思ひいでられてこころやすければ

わがねがひながくみてよと思ふことこれもぞ神のもろ心なる

おなじくつとめて供米をいただくとてまた

祈りおくわがするゑまもれ年を經てなれし名殘を神もおもはば

山莊に御幸ありける前つかた舊院を夢に見た

てまつること三度におよばれければ 享保九年十月朔 元陵御記

三たび見し中にもわきて言の葉をかはせる夢ぞさらに嬉しき

鳳足はさるあやしき器にしあらねど故院の御

硯なればとて端溪の秀石にもかへずここに宰

相中將源朝臣は武を備へ文をかねて絶代の名

士なりよりて命じてかの銘をしるさしむそれ

文のこころ忠義の氣をふくみことば金玉の聲

をなせりこれにむくゆるに朕何をかせむただ

遠くこの硯をつたへて久しくこの文を殘さむ

といふそのことばにいはく 天和二年 御集一本

つたへゆく硯の石のよはひもて世世にのこさむ言の葉ぞこれ

道の心これ微なりともろこしのひじりもいへ

りさればやまと歌もむねふかくきはめたる先

達はありての世にもなほまれなるよし人麿貫

之がなくなりにたるしりへにはただ京極の黃

門のみぞいにしへをただし今ををしへひとり

この道のひじりなりけるここに其門弟信實の

朝臣まのあたりに眞影をうつしとりたる一軸

の影あり今日黃門の遠忌にあたりぬればかの

影の前にいささか觀念のついで「よももちあま

りいそぢ」といふことをかしらにすゑてこころ

ざしのゆくところ筆にしたがひて十篇の卑詞

をかきつけをはりぬ道の末弟いかでか追慕せ

ざらむやといふ（元藤三年御集一本）

世を經てもたどらぬ道のしるべとや影のこしける有明のつき

ものいはば問はまし言の葉をしげみ昔をいまとむかふ月かげ

ももしきの外衛もる夜は月にだに心をわけて待たずやありけむ

近き世もその名聞ゆる人をさへ月のもとには戀ふるならひを

あふぐぞよ殘るをひろふ言の葉もなほおほ空の月にたぐへて

ましてその秋やうき世のなかのあきはつかの月の影さえし空

りうんして跡ある身にもかしこしと月に交はる身をや思ひし

いにしへの夢とはるかに照しける世世あきらけき月を殘して

そことだに知らぬむかしの軒の松馴れて久しき月のとまりや（あ（イ））

ちぢの秋もこよひの月の影そへていにしへ今の道てらさなむ

天和三年六月朔日當年歌道灌頂せし宿願をはたさむがため住吉玉津島の兩社に五十首和歌

法樂せし朝蛛のさがりて侍りければやがて釉につつみて（御集一本）

嬉しさを包みかねたる釉の上に今日しもあれや蛛（な（イ））のふるまひ

享保十四年三月二十八日醍醐前內府の山莊に御幸ありけるとき（元御記殘）

宮居より西なる賀茂の山にきてなれしむかしの人をしぞ思ふ

たらちねのおよばずたかき位山のぼりし人のやどをとひきて

三條西大納言七旬にみちたる心をよめる歌あ

また御覽にいれられしがなかに「今年より三十

かぞへばももとせに一年足らぬ春に逢はまし」

とありけるに御かへし（御集一本）

百とせといはふに飽かぬゆくすゑは三十數ふる後もかぞへむ

三條前亞相の八十の賀につかはされし（同）

八十ふる霜もわすれよいまよりの千代を二葉の松にかぞへむ

若宮を兵部卿の御養子のことありし御よろこびごとに御宴ありしとき兵部卿宮のよみたまひける「いかにしてなににたとへむかり衣袖にも身にもあまるめぐみを」といへる歌の御かへし　御集一本

嬉しさのあまるたもとに今日はまた包みぞ添ふる玉の言の葉

源前大納言任槐所望の事あり老年といひ家例にもおくれぬればましてもゆるさるべきこととおぼし給ひしころいぬる元祿十二年の百首に「あらためて見まくもほしの位山のぼりし世世の月のひかりを」とよみたりしを思ひいで給ひてものたまひし御つつみ紙に　同

あととめて今こそは見め幾年か待ちこし三つの星のくらゐも

延寶五年七月五日新廣義門院かくれさせ給ひしのち法皇の御かたより追悼の御歌おくられける御かへし

彌陀の名號をかしらにおかれし手向の御歌さこそなきかげのあり難くもかたじけなくもとおしはかるるにもだしがたくてかの六字をおなじく初句にかうぶらしめ卑詞をつづりて和したてまつるとしかいふ　御集一本

なげきわびぬ誰れかは知らぬ道理もただ今さらの夢の世の中むせかへりなほかきくらす涙にも曇りもあへずむかふおも影ありし世はこころとどめず見し事も聞きしも更に思ひ出でつつみつの界はなれしきはのひとことにかならず六の道も迷はじ

たらちめ(イ)の世をいつまでと頼みおきてなどこの道を盡さざりけむ
ふかきえにあればこそあれ親と子の世を隔てても逢はざらめやは

東福門院かくれたまひしのち延寶六年七月の
はじめつかた倚廬にてよませ給へる御歌 御集一本

もる月の光もくらしあしすだれかかるおもひの秋のけしきに
かなしきは三年見ざりし面影の忘れずながらさだかにもなき

延寶七年八月十二日故照高院道晃の遺物として
徹書記の後成恩寺へたづねたる源氏物語不審
の一卷を中院前大納言持參せしかばいまさら
の懷舊もよほし侍るうへ去年冬のころにか六
七年ばかりへだたりて對面せしことなど思ひ
いでられしほどに中院大納言が許へ文のはし
にかきつけてつかはせし 同

たえて見し夢のうき橋長き世のかたみとまでは思ひかけきや
いまさらの忘れがたみの帚木(はゝき)に似たるおも影たちむかひつつ

中院前大納言の御かへし「ながき世をかけても
忍ぶかたみとや思ひわたりし夢の浮橋」淺から
ぬめぐみを見ても帚木のあるよならばとした
ふ面影」

天地船(ふね(イ))をかくすとかやされば鶴算(寶(イ))龜齡を祝す
といへどもただ一場の夢にわかれて聲をのみ
待ちしあかつきは更にわきまふるかたもなか
りしこ(イ)と後の葉月はじめの八日いつしかと御
はふりの夜にさへなりぬ墨染のくれ深くなる
ほど御車よせたてまつらむなどもただ今にこ

そとおもひやれば手引の綱のながきかたみに
御前火のほかげをも見だにおくらぬはかなし
きかぎりになむしかあれどかくれたまへりし
は觀世音菩薩の成道の日にて年頃の御本意に
もはべりしうへ今夜彼岸にあたりたまへるを
さへおもひつづくればかたがた佛果もいちじ
るき心地して上の品に生れたまはむことは夕
月夜おぼつかなきにしあらぬをあかつきやみ
のまよへるこころに愁の雲のむねにふたがり
なみだの雨のまなこにさへぎりはべるは世の
ことわりもわきまへ知らぬおろかさよとなき
御爲をしひておもひかへすほどに月もいりぬ
べし 延寶八年閏八月八日舊院御逆修の夜の詞

この世にはとざさぬものと月もいま山より西に影かくすらむ
九月二十日後光明院五十回聖忌に 寶永元年御集一本
いそぢへし今日長月のはつかにも知らぬ御影を更に戀ひつつ
東山院の御初月忌日御看經のついで新院と稱
したてまつりしもむかしになりぬる事となげ
かせたまふに 同七年御集一本
ありし名も今はふるとし春かけてみそか數ふる今日の程なさ
東照宮百回忌日光山にて法會のとき心經かか
せたまうて將軍家にたまひし經の御つつみが
みに 同三年
ときありて開くに似たる法の花いく百とせもかくこそは見め
八月二十六日後陽成院百回の御忌御燒香のつ
いでに 同四年御集一本
靈元院御集拾遺

百とせも過ぐる葉月のはつかあまり昔の今日ぞいや遠ざかる

十數和歌 御集一本

一筋に世をながかれと祈るかな賴むみかさのもりのしめなは
二葉より契りおきてや藤波のこだかきまつにかかりそめけむ
三冬つきはるし來ぬれば青柳のかつらぎ山にかすみたなびく
四方やまにこのめ春雨降りぬればかぞいろはとや花の賴まむ
五代まで君につかへて歳さむき松のこころはならひきにけり
六の緒のよりめごとにぞ香は匂ふひく少女子の袖やふれつる
七十にみつの濱まつ老いぬれど千代のかぎりはなほぞ遙けき
八雲たついづも八重垣今日までにむかしの跡は隔てざりけり
九重に千代をかさねてかざすかな今日をり得たるしら菊の花
十かへりの花を今日よりまつが枝に契るも久しよろづ代の春

前參議實陰卿古今集御傳授のとき 同

ひさかたの天のうきはしかけまくもかしこき神の
みかどより心をたねとまなびきて世世に榮ゆる
しきしまのわが日の本のくにのかぜ吹き傳へたる
みちをまたいやつぎつぎにのこすとて和歌の浦なみ
ひとなみに名をのみかけておほけなくつたなき身をも
わすれつついにしへいまのうたごとに深きこころを
いひさとしひめおくことのかずかずに授けしまでの
日かずをばいく日ばかりとかぞふれば五月のつきの
はじめよりすがの根ながき日をおくりみそかの程に
ひさしくもなりにたれどもあめかせも時にしたがひ
おほかたの世世にもくさのさはりなく遂げしねがひは
うれしけれこれをおもへばいちじるく神のまもれる
このみちをこの世にまもれこのくにに ありとある人の

あふがざらめや
つたへゆくしるしは神のこころにて末たのもしき敷島の道

東山天皇御製

立春朝 大神宮御法樂千首和歌

出づる日の光のどけみ岩戸あけし神代おぼゆる春もきにけり

都立春 近代御會和歌集

名にしおふ言葉の花のみやこより色香を四方の春に見すらむ

早春 元祿六年十二月二十四日月次御會

のどけしな霞も今朝は立ちそめて春のいろ見ゆ天のかぐやま

初春松 近代御會和歌集

住吉やおなじみるめもあらたまのはるの海邊の松のひとしほ

毎日有春 寶永三年正月二十四日御會始

のどけさはむかふ日毎の朝がすみみどりそひゆく春の山の端

東山天皇御製

春生人意中　元祿十年正月二十四日御會始

はるになる人の心ののどけさはなほ花鳥のいろねをぞおもふ

禁苑春來早　同五年正月二十四日御會始

梅やなぎわが待ち得たる花園のいろかやよもの春いそぐらむ

瀧音知春　同十六年正月二十四日御會始

こほり解く瀧の岩がね波こえてひびきそひたる春ののどけさ

子日松　大神宮御法樂千首和歌

ひき植うる今日の子の日の二葉より待つ程遠し千代のおひ末

松含春色　寶永五年正月二十四日御會始

草木にはまだ見ぬ春のいろもまづ枝にこめたる春のひとしほ

泉溫草色春　同四年正月二十四日御會始

こほり解くいはがね清水あたりまで日かげのどかに青む若草

春到氷解　元祿八年正月二十四日御會始

風わたる汀のこほりうち解けていけのこころも春や知るらむ

河霞　大神宮御法樂千首和歌

かすみたつ五十鈴の川の川上やよにのどかなる春を見すらむ

連峯霞　近代御會和歌集

遠近の峯もひとつの春の色を見せてかすみの今朝はたなびく

曉鶯　大神宮御法樂千首和歌

聞き馴るる鳥がねならで春の夜の寐覺の窓にあかぬうぐひす

鶯是萬春友　元祿七年正月二十四日御會始

よろづ代もあかずぞ聞かむ九重の春の友なるうぐひすのこゑ

竹裏鶯　近代御會和歌集

あさな夕な聞きてもあかず吳竹の臺にき鳴くうぐひすのこゑ

岡殘雪　大神宮御法樂千首和歌

春の日の立つともわかぬ空見えてまだ雪さむき岡のべのまつ

東山天皇御製

若菜知時　元祿九年正月二十四日御會始

時をへて萌えいづる野邊の若菜にぞつきぬ千歳の春もつみしる

雪消山色靜　同十二年正月二十四日御會始

雪きゆる山はきのふのいろかへて春のみどりに霞むのどけさ

隣家梅　大神宮御法樂千首和歌

わがためと植ゑしばかりに中垣をかたえは越えて梅も咲きけり

梅有喜色　元祿二年正月二十四日御會始

草も木も春まちえたる色はあれどまづ咲く梅の心をぞおもふ

露暖梅開　寶永二年正月二十四日御會始

朝露も寒からずとやいつしかにかた枝まづ咲く梅のはつはな

水邊梅　近代御會和歌集

影うつす梅のしたみづ流れてのするはにほひの淵となるらし

岸　柳　大神宮御法樂千首和歌

岸根ゆく水のけぶりもおなじ色のかげを深めて靡くあをやぎ

柳辨春色　近代御會和歌集

はるごとに見るともあかじ淺みどりのどかになびく庭の青柳

風來楊柳邊　元祿十七年正月二十四日御會始

吹きくるものどかなる世の春風になびくぞあかぬ青柳のいと

雉　近代御會和歌集

子を思ふ道やはしらぬこころせよ雉子鳴く野とはるのかり人

野外春駒　元祿六年十月二十四日月次御會

心をもひきやとどめむ春の野にゆきかへりつつ駒いばふこゑ

樵路早蕨　大神宮御法樂千首和歌

爪木にはあらぬわらびも山人のわが家づとと手折りてやゆく

春曉月　同

かすむより春のならひの有明につれなくかかる月のよこぐも

東山天皇御製

春月幽 大神宮御法樂千首和歌

春の夜の月はかすみのうすごろも中にありてや影へだつらむ

春駒 同

のり行くも心をやひく打ちむれて嘶ふむまきのとほき春野に

歸雁似字 同

故郷にたがことづての言の葉をかきつらねてか歸るかりがね

尋花 同

一木さく蔭にとまりて分けぞ入る見てもみまくの花の山路は

閑庭花 同

あひ思ひ散ることなくて靜なるこころをやどの花にをしへむ

花挿頭 同

のどかなるはるの心のあかなくに散らずは櫻千代もかざさむ

三月三日 同

をりにあふ花をも醉の色と見て酌むや彌生の今日のさかづき

山田苗代 同

これもまた苗代小田にひきかけて山下みづの絶えぬしめなは

摘菫 同

摘みたむる袖の菫もむらさきのねずりに通ふいろや染むらむ

嶋欵冬 同

今もたれ舟さしとめてたちばなの小島にめぐるやまぶきの花

池藤 同

花に吹くはるかぜ見えて池水のそこなるかげもなびく藤が枝

留春難 同

雲風をただゆくへにて留むるにとどまる道は知らぬはるかな

松竹春增色 元祿十一年正月二十四日御會始

千千の春あかぬみどりのいろそへて松と竹とのあひおひの陰

東山天皇御製

椿葉春久 元祿十三年正月二十四日御會始

八千とせのみどりをも見む玉椿うゐる世とほき春をかさねて

山殘春 近代御會和歌集

かへりにし古巢の山をもとむとも春はいくかのうぐひすの聲

卯花似月 大神宮御法樂千首和歌

卯の花は月のかつらの一枝といふばかりにも咲けるいろかな

朝郭公 同

待たるるは初音のみかは朝戸あけむかふ外山の山ほととぎす

浦郭公 同

おのが身をたぐへまほしと浦浪の歸る方にや鳴くほととぎす

橘薫枕 近代御會和歌集

見ぬよをばしのぶる夜半の手枕に花たちばなも香に匂ふらし

廬橘薫風 大神宮御法樂千首和歌

百敷にむかしの風はのこれとや袖の香とほくにほふたちばな

瀧五月雨 同

つねはせく岩にもかけて瀧の絲のみだれそひぬる五月雨の頃

夏夜 同

遣水のあたりの籌すずしさにたくやほかげもみじか夜のそら

草螢 同

暮れぬまはすがる螢のおもひをやしのぶが原に亂れ飛ぶかげ

早涼到 近代御會和歌集

昨日までたち待たれつる袖の上にこのゆふぐれは秋風ぞ吹く

墻夕顏 大神宮御法樂千首和歌

はひかかるかづらも草の垣根には咲きてやそれと夕顏のはな

夕納涼 同

夕づく日かげろひわたる庭に出でて立ち休らへば袖の涼しさ

東山天皇御製

初秋雲 大神宮御法樂千首和歌

たなびくを秋の空とはしら雲のはつかに見るも色ぞ身にしむ

二星適逢 近代御會和歌集

天の川あふせの波のたまさかに待ちえし星やこよひうれしき

七夕橋 大神宮御法樂千首和歌

おのが上に羽根をならぶる契もや年のわたりのかささぎの橋

七夕祝 近代御會和歌集

年ごとの秋をためしに天の河けふの逢瀨は千代もかはらじ

庵露 大神宮御法樂千首和歌

露けさを何いとふらむこころから結びかおきし草のいほりに

江荻 同

浪風はすさぶ入江のしほがれになほこゑ絶えずさわぐ荻かな

徑女郎花 同

千草咲く野邊の行手の女郎花わきては折らじ名にもこそたて

庭刈萱 同

みだるるにまかせもはてず刈萱のしたをれいそぐ庭の秋かせ

夜蟲 同

限あれば聞きすててぬる後もなほ長き夜すがら蟲や鳴くらむ

遠歸雁 同

この朝けいまだ旅なる雁がねやみやこの外のそらにはるけき

山鹿 同

へだてつつ寐る夜をうしと山鳥の尾上の鹿やつま戀ひて鳴く

澤鳴 同

ふしどとや賴む野澤のゆくへなき水にかずかく鳴のはねがき

關駒迎 近代御會和歌集

秋霧のはれ間待ちてや逢坂の關たちいづるもちづきの駒

東山天皇御製

秋　雨　大神宮御法樂千首和歌

庭もせの桐の落葉におとはしてくもりもあへず秋のむらさめ

關　霧　同

秋をへてとざしせぬ世ぞ逢坂は霧やへだつるせきとなるらむ

杣　月　同

杣人は知らずや月の中にさへ木をきるおのがたぐひある世を

明　月　近代御會和歌集

こよひその光やは見むあきらけき月の名をかる秋はありとも

湊　月　大神宮御法樂千首和歌

われのみや湊によるのうきねせむ月のみ舟はここにとまらで

社頭月　同

天つ日にならべしひかりいまも世をてらすや秋の月よみの宮

近　擣衣　同

さぬる夜のあと枕にもうつ衣いづくにかせのきぬたとは聞く

擣衣到曉　元祿六年九月二十四日月次御會

しづの女が夜寒わびてや有明の月ふくるまでころもうつらむ

野　分　大神宮御法樂千首和歌

明日よりはいかに見るべき草木とか夜の野分の吹きしをるらむ

江　鶉　元祿六年九月二十四日月次御會

眞野のうらの入江の秋やさむからし床をならべて鶉なくなり

松　蔦　同

はひかかる蔦のもみぢ葉松が枝の緣はえあるちしほ見せける

栽　菊　大神宮御法樂千首和歌

さまざまの色香にあかぬ宿の菊またこの秋も植ゑそへて見む

暮秋霜　同

行く秋のあとだに見せよ野邊の霜さこそ冬待つ色におくとも

杜時雨 大神宮御法樂千首和歌

秋だにも染めぬものから杜の名のときは來ぬとや猶しぐるらむ

落葉隨風 同

さそふこそ風のこころのままならめ何か木の葉の思ひ亂れむ

野寒草 同

殘りけりみな冬がれのくだら野に霜もくたさぬ萩のふる枝は

谷氷 同

つたひくる水はかれてもそのままに氷ぞとづる谷のいはがね

夜千鳥 同

ふけぬるか月もさしでの磯づたひむれて千鳥の聲ぞ冴え行く

濱千鳥 同

あらましき波もひとつに濱風のふきあげの千鳥友まどふらし

篠霰 同

それと見む降るや霰のささの葉にさやぐは玉の聲ならねども

閨上霰 元祿六年十一月二十四日月次御會

しばしなほねやのあられの音はしてさそふ枕の夢ぞのこらぬ

夕鷹狩 同

いくつかれ日を暮しても狩人のかへさやをしき野邊の鳥立に

初雪 大神宮御法樂千首和歌

庭の面のしろきを後と空にのみ散りてや消ゆる今朝のはつ雪

山雪 近代御會和歌集

さゆる夜の松のあらしも埋もれて幾重かつもる山のしらゆき

都雪 大神宮御法樂千首和歌

いづくとも心はわかず雪の日に向ふみやこの四方のやまやま

野雪 元祿六年十一月二十四日月次御會

降る雪のゆふべをさむみ思ひやる野守がいほや埋みはつらし

神　樂 近代御會和歌集

住吉の松にならへと榊葉をとりかへしうたふよろづ代のこゑ

除　夜 大神宮御法樂千首和歌

桃の弓葦の矢をもているよはの早くもよひに明けむとすらむ

逢夢戀 近代御會和歌集

逢はざらばあやないつまで誠なき夢をうつつのなぐさめにして

忍久戀 元祿六年九月二十四日月次御會

思へども人にはいはで年月をうきみながらに過ぐるはかなさ

寄月戀 大神宮御法樂千首和歌

あぢきなくこたへぬ月をかこちてもとはず語(がたり)は幾夜しつらむ

寄霧戀 同

知るらめやその方の空と見し日より霧ふさがりて晴れぬ思を

寄朝戀 同

心せよはかなき夢をしたふとてことわりがほに見えむ朝いは

寄夕戀 同

契らねば又待つとなき夕暮もひとりある人のならひにやうき

寄山戀 同

いかなれやわけ見まほしき心のみつくばの山にまどふ戀路は

寄崎戀 同

靡くやと人の名のりそ刈りて見むいらこが崎の蜑ならぬ身も

寄石戀 同

動なく見えてぞつらき我がかたに千引の石のひかぬこころは

寄田戀 同

あきの田のかりにも人やとはざらむ風になるこの驚かさずば

寄井戀 同

むすびけむ契やあさき山の井のあかでも人の手をばかれゆく

寄床戀　大神宮御法樂千首和歌

とりとめぬ面影はなほ身にそひていやはかなかるとこの獨寐

寄薦戀　同

うき契あさかの沼にかるこものかりそめならずおもひ亂れて

寄沼繩戀　同

ひとりやはいはれの池のうきぬなは浮名は人のためも苦しき

寄宿木戀　同

ねも見ずばよしややどり木朽ちね唯かかる心の色ものこさで

寄猪戀　同

諸共にふすゐも知らぬ身は幾夜かひもなくのみ夢も見ざらむ

寄繭戀　同

桑子にもならぬ憂身のいつとかはふたごもりする世を頼むべき

寄鏡戀　同

ます鏡見つつかはせる言の葉やともに身に添ふ影のこしけむ

寄紐戀　同

かくながら明して見ばや入紐のとけてそひふす夜の火かげを

寄笛戀　同

うきふしにたえぬものとは笛竹のよそにても聞く音をやたてまし

寄手向戀　同

ひとたびの手向はうけつながらへて見む行末もなほや祈らむ

寄箏簧戀　同

もれざらむことは形見のその名をも知らでくみ見し自らぞうき

嶺　椿　同

たぐひなや松の千とせの春秋をやつをのつばきおのが常磐は

杜　柏　同

冬さむきあられはさぞな村雨のおとも身にしむ杜のかしは木

江　菅大神宮御法樂千首和歌

これもまた笠にぬふてふ三嶋江のおりたつ賤の眞菅かるらむ

名所嶺同

いく里のよそに見ゆらむ葛城やかかるもたかき嶺のしらくも

名所岡同

咲く萩のいろにはそめて旅人もゆききの岡にたちとまるらむ

名所原同

かしこしな山田の原にたつ杉のなほきをもととまもる宮居は

名所路同

とひ見ばや布留の中道古き世にかへるしるべは今も有りやと

名所瀧同

龜の尾の瀧のひびきにかよひきて松吹く風もよろづ代のこゑ

名所海同

伊勢の海のなぎさに拾ふたまたまもあれや藻屑の中に交りて

羇中關同

わけきつる山路のつかれやすめてやまた越えゆかむ關の岩角

羇中嶋同

ちかくむかひ遠くうかびて嶋嶋のかはるみるめや波のうき船

羇中里同

鳥がねもいづくまでかは送りけむ里遠ざかる野邊のあけぼの

山家春同

雪こほりときしありては來る春のあともやおそくみ山べの里

田家秋同

おどろかず小鹿も鳥もなれなれて人にまぢかき小山田のあき

曉夢同

したふこそなほあだならね曉のまくらもしらぬ夢のゆくへは

東山天皇御製

眺　望 元祿六年九月二十四日月次御會

立ちつづく雲と波とのすゑとほみ見えずなりゆく沖のつり舟

野眺望 大神宮御法樂千首和歌

入日さすかた山本は里見えてうちけむる野のすゑぞはてなき

寄雲述懷 同

なにならぬ思の雲もながめする空にみちてはるけかねつつ

谷樵夫 同

木こりさへ行き通ふべき所とは見ぬ谷かげにうたふこゑして

谷樵夫 近代御會和歌集

谷陰ははや暮れぬとやおのがどちさそひかはして歸る柴人

岸頭傀儡 大神宮御法樂千首和歌

たれとなくまた逢ふ事はかた岸の松のねてゆく人や待つらむ

詔　書 同

みことのり君がくはふる一筆のあとのままなる世を仰ぐらし

七　夜 同

めづらしき今日の七夜に玉のをのことぶきそふるやどぞ賑ふ

玉津嶋 同

いにしへの衣とほりし光をやなほやはらぐるたまつしまひめ

寄天祝 同

仰ぎみる天のみちをばはじめにて世はひさかたの末も限らず

禁中祝 元祿三年正月二十四日御會始

家家のつたふる道もすゑとほくわが百しきの千代ちぎるらし

水石歴幾年 同十四年正月二十四日御會始

今よりの春も幾千代かぞへ見む池のさざれのつきぬためしに

池水久澄 同六年正月二十四日御會始

あひにあふ春のみどりをせきいれて幾世すむべき庭のいけ水

東山天皇御製

禁庭松久 近代御會和歌集

色かへぬ雲居の庭の松が枝にいまよりちぎる千代のゆくすゑ

植竹爲友 元祿四年正月二十四日御會始

いく春のわが友と見む植ゑしよりかはらぬ色の庭のくれたけ

鶴馴砌 同十五年正月二十四日御會始

庭の面にあかずなれてやかぎりなき春をかさねむ鶴の毛衣

鶴有遐齡 寶永六年三月七日御會始

すゑとほくおのが千年のよはひをもちぎれ雲井のにはの友鶴

元祿五年九月本院七十の御賀に鶴契遐年 近代御會和歌集

あしたづの齡を君に祝ふよりなれもややすく千代はふるらむ

前内大臣宗條公七十の賀に松延齡友 元祿七年九月

かげ高き松のよはひもとりそへて今より千代の秋を待ち見よ

中御門天皇御製

立春 享保八年三月十八日柿本社御法樂 好古集說

この道の光もそひてのどけさを世にしきしまの春はきにけり

春風解氷 正德二年正月二十四日御會始

かせわたる汀のどけき春見えてこほり解けゆく庭のいけみづ

凍消池水暖 享保十七年正月御當座

いろくづの遊ぶも見えて水ぬるむ池のこほりは殘るともなし

春到管絃中 正德五年正月二十四日御會始

春に今しらぶる琴のおのづからをさまれる世の聲はのどけし

禁苑春來早 同六年正月二十四日御會始

山はまだ雪にむかへどわが園の木の芽ぞはるの色を見せける

霞添山氣色 享保二十年正月御當座

春はまづはる待ちあへず山まゆのにほひおほくもたつ霞かな

初春待花 同八年正月御當座

待ちわびてこころの花はまづ咲くを櫻に告げよ春のはつかせ

初春祝道 同十八年正月御當座

人の世となりていく千代しき島の道のさかえはまづ春にみむ

貴賤迎春 同十一年正月御會始

かみしものしなこそかはれ待ちえたる心やたれもおなじ初春

迎春祝代 同十五年正月御會始

わが代にもところをえてや民までも心のどかに春をたのしむ

禁中佳趣 同十年正月御會始

をりにあふもものつかさのにぎはひもまづ春しるき九重の庭

春情處處多 同十六年二月六日御會始

誰れもいま垣根にかをる梅をめで野邊の遊になさけをやくむ

柳色辨春 正德三年正月二十四日御會始

あさみどりそむる柳のはつしほや花よりさきに春を見すらむ

庭梅久芳 同四年正月二十四日御會始

よろづ代をふるともあかじのどかなるわが九重の庭の梅が香

梅有色香 享保十三年正月御會始

この春のみやづくりする嬉しさを梅も色香に見せて咲くらし

梅香移柳 同四年正月二十四日御會始

青柳のえだにもあかず咲く梅のにほひをかしてなびく春かせ

二月十八日禁庭の梅の花にそへて院の御許に

たてまつらせたまへる 同十四年

言の葉はにほひなくとも梅の花手折るこころを君は知らなむ

竹裏聽鶯聲 同二年正月二十四日御會始

中御門天皇御製

いろかへぬ竹のうてなに鶯の鳴く音や千代のはるを告ぐらむ

春情有鶯 享保九年正月御會始

咲く梅のそのふもあれど春といへばまづこそあかね鶯のこゑ

鶯有歡聲 同十九年正月御當座

うぐひすの春わかがへりさへづるは千年ふるともあかぬ聲哉

花爲佳會媒 同十四年正月御會始

かくてなほ花しちらずば千代もとはここにやちぎる雲の上人

風靜花芳 同十六年三月十九日御當座

春風は吹くとしもなき殿のうちにほひはちらす花の夕ばえ

三月十一日院の御もとに

今日は吹く風ゆるく花の色も夕日のかげに光

そひて君に見せばやとながめくらして 靈元院御集

折りとれば色もはえなし花ざくらいかにか見せむ今日の盛を

華夷皆樂春 享保七年正月御會始

花鳥をめづるこころのどけさは鄙もみやこも春にかはらじ

桃源春色久 同二十年三月三日詩歌御會

仙人のすみかはさぞなここにさへ幾春めづるもものはなぞの

江上春望 同六年正月御會始

浦波ははるかにかすむなには江に風さむからず梅もかをりて

曉卯花 同十三年五月二十四日御月次

雲にあふ月のなごりを卯の花のひかりに殘すありあけのには

遠山氷室 同年七月御月次

いかばかりとほき山路ぞ氷室もる夏に知られぬおのが住居は

霜園紅葉夕 同年九月二十四日御月次

植ゑしより秋に心をおく霜のいろをそのふの木木にこそ見れ

雪埋苔徑 同年十一月二十四日御月次

中御門天皇御製

むす苔のいくへの雪のふる道にいまこむ春のあとぞ待たるる

嶺樹深雪 享保十三年五月十六日鞍馬御法樂

枝に見し雪や夜ふかく積るらむまくらのみねの木木のした折

炭竈 同十四年二月九日春日社御法樂

雪のうちも煙をたてて炭がまの里のよそ目ぞあたたかげなる

戀笛 同十三年十二月

それぞとはよそに聞ゆる笛竹のねたしや人を手にもならさで

寄雪戀 同年十一月

きぬぎぬの月の面影立ちかへり身にしむ雪のねやのあけがた

寄江戀 同十四年五月十八日公宴御當座

戀ひわぶる身はいつまでか江の水の水隱(みごもり)ながら年も經ぬべし

古渡雨 同十三年五月

わたしもりはや舟いだせふる雨によどの澤水みかさもぞ添ふ

古宅月 同年七月

まばらなる軒端もりきて住みすてし誰れをしのぶの露の月影

淵龜 同年十二月二十四日御月次

すむ龜のここに年へてきくの露つもれる淵の世をかこふらし

旅行友 同十四年正月三十日院御當座

友とするひとりふたりの旅の道しらぬ野山もたれにとはまし

旅宿憶都 同十三年五月

へだててはは便もいく日しらぬ野のかりねにいとどしのぶ故郷

暮宿波上島 同年九月

舟よせてたのむ一夜のいへしまにあらくなかけそ今日の夕波

宮城野 同年七月御月次

みちのくのしのぶの衣あきたてばまた宮城野の萩がはなずり

明石 同

中御門天皇御製

朝霧のあはれをおきて月をのみあかしの浦とたれながむらむ

筑波山 享保十三年七月御月次

立ちかへりまどはばいかに筑波山さはらぬ道と思ひいりても

上陽人 同

宮の中にめづとはなしに秋をへて老いぬる身をや月に愁へし

寄山述懐 同年七月二十九日

くらぶ山つづら折なるそれよりも世に經る道やなほ安げなき

寄社祝 同年二月二十二日水無瀬宮御法樂

よを思ふこころは今もかはらでや水無瀬の宮居きみ守るらむ

寄道祝世 同二十年五月十三日御會始

くれ竹の代代にかはして治めゆく道すぐなりと聞くが嬉しさ

池水長澄 同三年正月二十四日御會始

苔むせるいはほも松もとりどりに千代を見せつつすめる池水

綠竹年久 同五年正月二十三日御會始

うてなるみどりの竹のわが世にもかはらぬ色を幾年か見む

十二月二十七日院の七十の御年滿をいはせられてよみてたてまつらせたまへる 同八年靈元院御集

七十の今年を千代のはじめにてなほよろづ代もかくて數へよ

池岸有松鶴 同十二年正月御會始

幾年もわがともづるやこの池のきしなる松のかげに住むらむ

大樹五十の賀に鶴遐年友 同十八年

わが世をばゆづるの後の八千年もかくてともなへ老のゆく末

秋のころ紅葉の枝につけて院の御もとにたてまつらせたまへる 同十四年靈元院御集

この秋は御幸あらねどなぐさめよ飽かぬ藐姑射の山の景色に

十一月二十三日院の御もとにたてまつらせた

まへる　享保九年靈元院御集

なにごとも君にまかせて頼むぞよ言葉の道のしるべのみかは

八月九日院の御許に墨筆をおくらせたまへる

ついでに

故院はかなくなり給ひて五十年になりぬるは

夢の間にしてその世のこともさらにおぼし出

でらるべき秋になむこのたび供養せらるる經

は御手づから書かしめ給はむにもしやとおも

ひよりて　同十四年靈元院御集

おもひよる心を知れな墨筆はただなにならぬものと見るとも

月といふこころにてつくらせ給へるなぞなぞ

の御歌　忤城遺事

秋風のはらへば露のあともなしはぎの上葉はみだれてぞ散る

櫻町院御集

春

年内立春　元文五年十二月二十三日

雪もなほふるとしながら來る春を空に見せてやまづ霞むらむ

立春　寛保三年十一月五日春日社御法樂

君も臣も身をあはせたる我が國のみちに神代の春や立つらむ

立春　同四年六月一日玉津島社御法樂

くもりなき春のひかりに玉津島今朝よりかすむ和歌のうら波

立春　延享三年十月二十五日聖廟御法樂

春もけふ北野の杜はかみがきの松のひとよにかすみそめぬる

立春　寛延二年二月二十五日

朝づくひ今日たつ春のひかりをもみつの始のそらののどけさ

立春霞　寛保二年五月二十一日

あさ日かげ春たつそらののどけさに大内やまぞ霞みそめぬる

陽春布德　寛延二年正月十二日御會始

たのしめる民のこころもやす國の世は花鳥のはるののどけさ

初春　元文四年六月二十五日聖廟御法樂

朝戸出の袖さむからぬ春かぜにむかふ外山もかすみそめぬる

初春　同年十一月九日

やすみしる道をひかりに日の本のめぐみ隔てぬ春はきぬらし

初春　寛保四年十二月二十二日水無瀨宮御法樂

和歌のうらや春たつなみの朝づく日のどかにかすむ玉津島山

初春霞（衣イ）　寛延二年二月十六日

をりはへてあまつみそらの朝霞たつやはごろも春もきぬらむ

初春山　延享四年二月二十二日水無瀨宮御法樂

雪きゆる外山の松のうすがすみまだ深からぬはるのいろかな

都初春　同二年五月二十五日聖廟御法樂

みやこびと行きかふ袖もはるばるとかすむ北野の今朝の初春

初春松　寛保四年六月一日住吉社御法樂

春はまづかすみわたりて神垣の松もいろ添ふすみよしのはま

初春松　延享五年二月二十五日聖廟御法樂

色そへて吹くや千年をまつの葉のみどりのほらの春のはつ風

初春梅　延享二年五月九日

いとはやも春くる風にまづ匂ふ若木のうめの千代のはつはな

初春鶯　元文三年六月十五日

なれも今日こころの松にひかれきて鳴くやはつねの野邊の鶯

初春鶯　寛保四年二月二十四日

ことの葉の道もさかゆる初春を千年や告ぐるうぐひすのこゑ

初春祝君　延享五年正月二十四日公宴御會始

まつりごとくもらぬ千代の春はきぬ星のくらゐも君を輔けて

早　春　寛延二年正月十八日玉津島社御法樂

花鳥もこころにまかす佐保姫のわが世とやおもふ四方の初春

早春風　延享五年二月八日

梅さくらまだ雪消えぬ園生にも吹くやこのめの春のはつかせ

早春霞　同四年六月十八日

名にしおふ霞も洞の春の色に千代をこめてや立ちはじむらむ

早春水　同年正月二十九日

池ひろみ汀の木の芽はる風にこほりうち出づる浪のはつはな

早春氷　寛保二年正月二十八日

うすごほり今朝とけそめて春風の吹くものどけき池のささ波

山早春　元文四年正月二十六日

うららかに日影もにほふ山の端の霞にしるきはるのいろかな

山早春　寛保二年二月

關こえて春はきにけり逢坂のやまのあなたもさぞなのどけき

山早春　同四年八月二十八日柿本社御法樂

石見のやたかつの山のほのぼのと霞みそめたる神がきのはる

早春河　元文□□二月二十二日水無瀬宮御法樂

山河やこほりも今朝はひま見えて吹くあと(かた)しるき春のはつ風

早春浦　延享五年正月十八日玉津島社御法樂

玉津嶋かすむみるめものどけしな千代の春たつ和歌のうら波

都早春　享保二十一年二月五日

日をへては待ち見む花も名にしおふ都のはる(やイ)にまづ霞むらむ

早春梅 享保二十一年二月二十五日聖廟御法樂

はる來ぬと梅さかりなる神垣のまつ吹く風も香ににほふらむ

氷解 同年五月二日

春の水みつてふ四つの澤邊をも池のこほりの解くるにぞ知る

雪消山色靜 元文六年正月二十四日御會始

天地のやはらぐはるに山はいま雪も解けつつかすみたなびく

子日 寛保三年正月九日

はつねの日生ひさき遠きいく千代を二葉のまつにちぎる諸人

子日 同年同月水無瀬宮御法樂

子の日する二葉の松の末遠みこもれる千代ぞかぎり知られぬ

寄子日祝 同四年正月九日

初子の日あかぬそのふの姫小松ちとせの春も曳きてあそばむ

霞知春 元文五年正月二十六日

春ぞとはかすむ空にぞ知られける花うぐひすの色音ならねど

霞始聳 寛延正月十八日住吉社御法樂

たちそめてそれかとばかり見るも今朝まだ春淺く霞む空かな

憐霞 寛保四年八月二十四日

春のいろはいつとわかねど曙のかすみぞ深きあはれ添ひぬる

曉霞 寛延三年二月十八日玉津島社御法樂

のどけしな春くるかたの山かづら霞みてかかるあかつきの空

朝霞 同二年四月十六日

春きては日をへぬ空も朝な朝なかすみ添ひゆく□□□のどけさ

山霞 同年四月十七日東照宮御法樂

日のひかり名におふ山の霞むらしあづまをてらす神垣のはる

山霞 同年九月一日內宮御法樂

かすみけり天てらす日の神路やま神代の春の立ちかへりつつ

霞滿山　享保二十一年二月二十二日水無瀨宮御法樂

水無瀨山このもかのもの春がすみ世を思ふ道や筑波嶺のかげ

連峯霞　元文二年二月二十五日聖廟御法樂

春がすみ立田の山のほのかにてつづくをぐらの嶺もわかれぬ

嶺樹霞　延享三年正月三十日

嶺とほき檜原がうへのいつよりも曇るやかすむをはつせの山

野邊霞　寛保四年二月二十四日

日ののぼる山ものどかに過ぐる野の末はるばると立つ霞かな

橋霞　元文五年六月二十五日聖廟御法樂

與謝のうみや春たつなみの朝ぼらけかすみわたれる天の橋立

霞中瀧　寛保三年十一月二十八日

山姫や春はかすみのころも手もかさねてさらすぬのびきの瀧

海邊霞　同年二月五日

和田の原かすみも八重の潮かせに見えがくれするおきつ島山

海邊霞　延享五年正月十八日住吉社御法樂

みづがきのまつも霞のそこづつを神代ひさしき住の江のはる

春濱霞　同二年四月二十四日

住の江や菊咲く秋もわすれ貝ひろふはまべのかすむあさなぎ

霞春衣　同年正月三十日

佐保姫のとほ山ずりの袖はへてのどかにたてる朝がすみかな

南枝暖待鶯　寛保四年正月二十四日御會始

小車のさすかたに咲くはなをとへ深山の霧にむせぶうぐひす

曉鶯　元文五年二月二十二日水無瀨宮御法樂

梅が香に月もかすめる有明をなれも飽かずやうぐひすの鳴く

朝鶯　享保二十一年三月二十七日

春もまだ朝霜ふかき園のうちに聲うちとけてうぐひすの鳴く

鶯出谷 寛保三年正月二十九日

うぐひすの心も花のみやこぞと谷の戸出ててはつね鳴くらし

鶯馴 同年三月十日

咲く梅の花をやどりに窓近みなれも飽かずや馴るるうぐひす

竹裏鶯 元文六年正月二十六日

梅つぼの花まつほどや呉竹のうてなに馴るるうぐひすのこゑ

名所鶯 寛保三年五月二十四日

咲くやこの花にぞ匂ふ難波津のいまは春べのうぐひすのこゑ

鶯歸谷 同年三月二十四日

暮れてゆく春を告げてや散る花の雪ふる谷にかへるうぐひす

鶯有慶音 寛延二年二月一日御會始

おのが時と花も霞もこゑのうちに千里の春をしむるうぐひす

若菜 寛保四年十月十日柿本社御法樂

摘めやなほいや年のはの春ごとに色もふりせぬ野邊の若菜を

若菜 寛延三年二月十八日住吉社御法樂

摘みそむる若菜めづらし飛火野の野守も告げぬ(しちぬイ)雪間もとめて(とめきてイ)

尋若菜 元文二年七月

いづことも知らぬ若菜の下もえは野邊の雪間を尋ねてやとふ(ぞ思ふイ)

若菜知時 寛保三年正月七日御内會

摘めやけふ野邊はありとも我が園の春しりそめて萌ゆる若菜を

野若菜 元文四年二月二十二日水無瀬社御法樂

むらぎえの雪間とめきてこの頃は日數も野邊につむ若菜かな

若菜契遐年 同五年正月二十四日御會始

ゆたかなる春をたのしむ諸人や若菜つむ野に千代ちぎるらし

寄若菜祝 寛保二年正月六日御内會

子の日せし松の千歳にとりそへて今日の若菜もここにこそ摘め

餘　寒寛延二年八月二十八日

はるさむみまだ冬ごもる霜雪に梅もにほはぬはるのつれづれ

湖水餘寒元文二年三月十九日

春さむみこほりかさねて濱の名の打出でむ波の花はいつ見む

若木梅延享二年二月二十五日聖廟御法樂

咲きそむる花こそあかね植ゑしより待たれし庭の梅の若木に

露暖梅開元文四年正月二十四日御會始

春をしる梅を見るにもなべて世に惠のつゆのかかれとぞ思ふ

露暖梅開寛保三年五月二十八日

わきてとく咲きそめけりなうつる日の露寒からぬ枝の梅が香

梅　風享保二十一年二月二十四日

たきもののそれにはあらで小簾のうちに匂ふや梅の花の春風

霞中梅寛保四年二月二十五日聖廟御法樂

鶯のこゑするかたにとめゆかむ梅が香かすむ野邊のゆふぐれ

月前梅

月影はかすみながらに咲く梅のにほひさやけきはるの小夜風

曙　梅元文四年十月二十四日

夢さむるおぼろ月夜のあけぼのにをりしもあれや匂ふ梅が香

曙　梅寛延二年六月二十四日

かすむ夜の明けゆくいろは花にみて月かげしらむ窓の梅が香

深夜梅延享五年五月八日玉津島社御法樂

ふくる夜はなほ春さむき閨の中もすきまいとはぬ風の梅が香

行路梅寛保三年十月十五日春日社御法樂

一枝はかざしてもがな行きずりの袖さへあかずにほふ梅が香

社頭梅寛延三年二月二十五日聖廟御法樂

色も香もこの神がきになほ添ふや文このむ名もしるき梅が枝

戸外梅 寛保二年六月二十四日

閨のとの隙間もりきて深き夜のそらだきものにたぐふ梅が香

庭梅久芳 同四年二月八日御内會

いく千代をとめ(ニイ)てみぎりに咲く梅のにほひもふかき九重の春

軒梅 同三年二月三十日

かげかすむ軒端の月の小夜風にしのぶのつゆもにほふ梅が香

名所梅 元文五年六月十九日

梅の花いまさかりなり難波(ハイ)津にむかしかはらずにほふ春かせ

梅有喜色 寛保二年二月七日

よろこびのつきせぬ色を春にまづ見せてや梅の花もほほゑむ

右記錄所名所障子被造被植梅木有披講白晝儀入夜有御獻

梅落衣 寛延二年十一月二十二日住吉社御法樂

うぐひすもかごとやかけむ梅の花折ればかつ散るそでの匂に

紅梅盛 元文二年二月二十七日

たつと見るかすみも色に匂ふなりくれなゐ深き梅のさかりは

柳辨春 寛保四年正月二十八日

青柳にまづうちなびくわが園の花もこのめもはるのはつかせ

春色柳先知 同三年正月二十四日御會始

うちなびき春待ち得たる青柳のえだにやはらぐ風のいろかな

風來楊柳邊 寛延三年二月十二日御會始

あさみどり春くるかぜの色そへてまづうちなびく青柳のいと

堤柳 延享五年五月二十日玉津島社御法樂

こほり解く水のけぶりも霞む江のつつみの柳なびくあさかせ

草漸青 寛保三年二月十八日女中御月次

うら若みやや萌え出づる初草の色めづらしき野邊のこのごろ

春月 同年四月二十四日

花鳥にあかずくらしてよるも猶かすめる月をめづるこのごろ

春月朧　元文四年三月二十三日

花鳥のいろねのみかは春はただあかぬかすみのおぼろ夜の月

河上春月　延享五年二月二十二日御影供

水無瀬川かすめる波に見る月もおぼろの清水かげやへだてぬ

浦春月　延享三年三月十八日柿本神影供

やくしほの煙になれてかすむとも海人は知らじな浦の月かげ

春曙　享保二十一年六月二十五日聖廟御法樂

花のいろ月のひかりも山の端にかすみてあかぬ春のあけぼの

春曙　寛保三年三月二十二日女中御月次

かげしらむ月もかすみのたちこめて梅が香深き窓のあけぼの

春曙　寛延二年九月四日外宮御法樂

宮川や千木たつかやの軒(が)見えて杉むらかすむはるのあけぼの

浦春曙　延享三年二月二十四日

海越のやま見えそめて浦とほくかすめる波もあけぼののそら

春雨　寛延二年二月十六日

かすみそふ山かすかにて鐘の音もゆふべ靜けきあめの中かな

庭春雨　延享三年正月三十日

うちかすむゆふべ靜けし草もやや青む垣根にそそぐはるさめ

歸雁　寛保三年九月二十四日

慕ひわびぬ見おくる空もはるばると霞に消ゆる雁のかへるさ

春駒　元文二年二月十一日

いとゆふの長き日かけて霞む野にいさめる駒の聲いばゆなり

野春駒　延享四年三月二十四日

草わかみ綠にかすむ野邊とほくあさるはる駒いばゆこゑごゑ

原春駒　寛延三年二月十八日住吉社御法樂

駒いばゆ聲ぞのどけきかすみたち風さむからぬ春の野はらに

野　雉　元文六年三月二十四日

野を遠みつまやこもれる若草のかすみがくれに雉子なくこゑ

雲　雀　享保二十一年三月二十四日

空たかく聞けば落ちきて夕ひばり末野のくさの床に鳴くなり

雲　雀　元文五年閏七月二十四日

朝まだき床やつゆけき春の野の芝生のすゑにひばり鳴くなり

野雲雀　寛保二年正月二十八日

あさまだきかすみ露けき春の野の芝生のすゑに雲雀なく(たつイ)なり

山路櫻　延享二年二月二十四日

櫻がり道もさりあへずこのごろは春の山邊につづくをぐるま

禁中櫻　寛保三年三月二十三日

植ゑしその種も吉野の山ざくら雲井のはるにいくよめづらむ

社頭櫻　元文六年二月二十五日聖廟御法樂

はふり子が行きかふ袖もかをるらし神のみまへに咲ける櫻は

栽　花　同五年五月十九日御内會

植うるより花も若木のすゑとほき春をみぎりに契りてや咲く

見　花　同年三月二十六日

春ごとにこころをとめて見れど飽かぬ花は幾千代九重のには(そイ)

見　花　寛保四年八月二十八日柿本社御法樂

雲とみし吉野の種をうつし植ゑて幾世みぎりにめづる花かな

初見花　同年二月十五日御内會

初花のいろさだかなる峯に今朝まがへし雲のそらめをぞ知る

遠近見花　寛延二年十月十六日住吉社御法樂

花のかげ駒ひきとめてながむれば高峯の雲もにほふはるかせ

花未飽　元文六年二月二十四日

いつの世に飽くべき花の色ならむ深くもそむる春のこころは

翫　花　元文四年三月十一日

千代もあかじ我が九重のさくら花かせもをさまる春の一木の下(イ)とき

禁中翫花　延享四年三月十二日御會

すめらぎの世世のかざしに匂へなほする久方の雲の上のはな

毎年愛花　同年正月二十四日

年ごとにめでしを花も忘れずば來て見む千代の春もちぎらむ

交　花　寛保二年三月十五日

咲く花のかげにぞ馴るる宮人もあけむらさきの袖をつらねて

折　花　享保二十一年六月二十四日

折りとりてかざしもあへぬ袖の上に雪かとおつる花をしぞ思ふ

花下送日　寛保三年五月二十八日

咲きしより飽かずくらして歸るさを今日も忘るる花の木の下

霞中花　元文四年二月二十五日聖廟御法樂

春がすみ立田のやまの花ざくら雲かとぞおもふ遠きよそめに

月前花　享保二十一年三月七日

いひ知らぬ色香のみかは盛なる花の木の間にかすむつきかげ

花色映月　延享三年三月一日

まとゐする庭の木の間にうつろひて月もはえある花の色かな

朝　花　延享二年三月二十四日

あさぼらけ有明の月ものこりけり霞みわたれる花のこの間に

夕　花　寛保二年三月十七日

長き日を飽かずめでても花の蔭くれゆく色のをしくやはあらぬ

山花似雲　寛延三年三月十八日柿本社御法樂

雲と見し吉野のさくら千代をへて言葉の花もたねぞつきせぬ

谷　花　寛保二年三月十五日

誰が植ゑし種にかあるらむ里とほきこの谷かげに咲ける櫻は(木イ)

河邊花 延享四年三月二日

日にみがく枝も白玉よる波に立ちならぶ花のにほふかはぎし

杜花 寛保二年四月二十九日

さくら咲く杜のしめなは長き日もむかふにあかぬ花の色かな

樵路花 延享五年九月二十一日玉津島社御法樂

柴人のかへるさおくる鐘の音もかすむ山路のはなのゆふばえ

杉間花 同三年三月一日

あふさかや高峯のさくら遙にも木の間に見ゆる杉のしたみち

禁中花 寛保二年三月十日

この殿のみぎりの花やいく千代の大宮びとのかざしなるらむ

庭上花 寛延二年三月四日(三イ)(五イ)

咲きそふやわが道芝のみぎりなる花もことばの花のたねとて

庭花盛久 寛保三年三月二十六日

風吹かぬ春にさかりもひさかたの雲井の庭のはなぞめかれぬ

花添春色 寛延三年二月二十二日後鳥羽院御法樂

もろこしは知らず日本の國の中の春の色香は花にぞありける

風靜花薫 寛保二年三月十二日

吹くもなほ枝はうごかで匂のみのどかにさそふ花のはるかせ

毎春花芳 寛延二年二月二十二日後鳥羽院御法樂

植ゑしうゑ(タネイ)ばつきせぬ春をねざしにて(トテイ)いや年年に匂ふ花かな

花雲 元文五年八月二十二日

うつる日の色こき雲のひとむらは花咲きけりなをちの山の端

落花 寛延二年三月四日

吹くままに情なげなる春かせのちらすも花のひとさかりなる

落花風 享保二十一年三月二十四日

風のうへにみだれて見しも吹きすさぶ木蔭につもる花の白雪

落花隨風 寛保三年三月二十四日

吹く風もしひてうらみじ誘はずばよその垣根の花を見ましや

落花如雪 同元年三月二十五日

散らぬまは待たれし人のとひくるも蹈むあとをしき花の白雪

花落衣 元文六年二月二十二日水無瀬宮御法樂

さくら色の衣に枝の花やなほにほひも添へと散りかかるらむ

寄花述懷 延享四年三月二日

風ふかき雲井の春の千歳あまりあはれのどけき花も見しかな

寄花祝 寛保二年三月十日

うごきなきわが大内の山ざくら花もやちぎるよろづ代のはる

野遊絲 元文四年三月二十四日

諸人の野邊にひかるるこころをも見せてのどかに遊ぶ絲ゆふ

桃花曝錦 寛保二年三月二十四日

夕づく日さらす錦もくれなゐのかすみにほふ桃のはなぞの

梨花 延享五年十一月二十九日住吉社御法樂

しのぶそのことばの花は世世へても殘るむかしの梨壺のはる

蛙 寛保元年八月二十三日

雨かすむ池のみぎはのくさがくれところ得がほに蛙なくこゑ

夕蛙 延享二年三月二十四日

くれふかみあぜつたひゆく小山田のなはしろ水に蛙なくこゑ

水邊蛙 元文二年三月二十四日

春雨にまさる水かさを待ちえてや澤邊にすだくかはづ鳴くなり

連日苗代 寛保二年三月二十四日

時きぬとなはしろ急ぐ賤の男や昨日も今日もかへすあら小田

躑躅紅 元文二年三月二十四日

松たてる岡邊の躑躅くれなゐにこがるる花のいろぞはえある

折躑躅　元文三年六月二十五日聖廟御法樂

こきいれし紅葉もいはじ岩つつじ手折る袖さへ色になるまで

欵冬露　寛保二年三月二十二日御內會

ませのうちに玉をかざりて山吹の花にかがやく枝のしらつゆ

岸欵冬

吉野川よしやさくらは散りぬとも岸のやまぶき咲きにほふ頃

松上藤　延享四年三月二十四日

松が枝の千代をや藤もかけて咲く初もとゆひの春のかざしに

藤松樹花　寛延二年三月十八日柿本神影供

藤の花ちとせの春もちりうせぬ松にかけてぞ見るべかりける

浦藤　同元年十二月二十三日玉津島社御法樂

藤のかげ飽かずや田子の浦人は折られぬなみを袖にかくらむ

池藤　同二年三月二十四日

ややしげる青葉こぐらき中島のまつにかかれる池のふぢなみ

暮春同

暮ひわびぬ月よ花よとなつさひていつしか暮るる春の名殘を

暮春鶯　元文四年三月二十四日

花ちりて春の殘るも今日明日をしたふに似たるうぐひすの聲

春朝　寛保四年三月十九日

今朝の朝けむかふの山の霞むよりまづあくがれて行く心かな

東風暖入簾　元文二年正月二十四日御會始

春のくるかたえ花咲(まづイ)く梅が香も小簾吹く風のさそふのどけさ

瀧音知春　延享五年正月十三日御會始

松に吹く風もしらぶる春のこゑたぎつ岩なみひびき添へつつ

禁苑春來早　同三年正月二十四日御會始

雲の上やまだ世に知らぬ花鳥のいろ音めづらし園のはつはる

江山春興多　延享二年正月御會始

またたぐひなみもなぎたる春の江のかすみの末にうかぶ遠山

水郷春望　同三年二月二十二日水無瀨宮御影供

水無瀨川えならぬ春のゆふべかな昔をかけてかすむやまもと

心靜酌春酒　寛保二年正月二十四日御會始

天が下たのしむ民のこころをもまづ酌みて知る春のさかづき

志賀浦　元文五年三月二十四日

かすみしく志賀のうらわの朝なぎに花の香おろす比良の山風

湯等三崎　寛保二年八月二十四日

のどかなる湯等のみさきの朝なぎに霞かかれる紀路のとほ山

末松山　元文五年三月二十四日

波かすむ有明の月になごりあれや春もやよひのすゑのまつ山

夏

首夏風　延享三年二月二十四日

なほのこる花にはよきよ夏の來てあかぬ若葉の木木のあさ風

首夏藤　元文四年二月二十四日

かへりつる春に見せばや夏かけてなほもさかりににほふ藤波

新樹　延享二年二月二十二日水無瀨宮御法樂

うすく濃く茂る若葉のこずゑよりかさなる山を庭に見せけり

新竹　寛延二年四月二日住吉社御法樂

ややしげる色ぞすずしき今年生のまだ陰あさき窓のくれたけ

河卯花　延享四年二月二十二日水無瀨宮御法樂

玉河はおなじ名とてや卯の花もさらせる布のいろに咲くらむ

卯花似袖　寛保二年五月十三日御内會

たをやめの袖かとぞ見る卯の花の咲ける垣根は白がさねして

神　祭 寛保元年四月二十四日

賀茂山やたつるつかひの馬くるま道もにぎはふ今日の神わざ

葵　露 延享五年五月八日玉津島社御法樂

あふひ草とる手にかかる朝露に日かげもうつる賀茂のかみ山

葵懸簾 寛保二年四月二十日御内會

あふひ草かけそふ小簾の朝風もきよくすずしき殿のうちかな

郭　公 延享二年五月二十四日

をちかへりここに語らへ一聲もあだには聞かじ山ほととぎす

待郭公 寛保三年四月二十八日女房御月次

いつまでかわれにつれなき郭公よそには聞きし人もこそあれ

郭公幽 寛延二年五月二十一日

ほの聞きし夜半の手枕そばだてて行方をしたふ山ほととぎす

郭公遍 寛保三年十一月五日春日社御法樂

このごろは誰が里わかず月になき雨にかたらふ山ほととぎす

雲外郭公 延享二年五月二十五日聖廟御法樂

雲にあふあかつき月にほととぎす定かにもなき空のひとこゑ

關郭公 寛保四年五月二十五日

かるかやの關路に名乘るほととぎす木丸殿のむかしをや思ふ

早　苗 同三年四月二十四日

夕風に葉のぼる露も數見えてみどりすずしき小田のわかなへ

採早苗 同年二月二十五日聖廟御法樂

露のまもいとまをしげに若苗をとりどりいそぐ小田の賤の女

五月五日 同二年五月五日

をりにあふよそひもすずし殿の裏の母屋の帳にかくる續命縷

菖　蒲 同四年六月一日住吉社御法樂

閨ちかき花たちばなや一夜しく菖蒲のねたくにほふたまくら

池菖蒲 寛保元年五月五日御内會

池水のふかきかをりをしるべにて眞菰にまじる菖蒲をぞひく

橘 同四年五月二十四日

うつし植うる軒のたちばな花も實もまして常磐に幾千年見む

橘 寛延二年四月二十四日

かれもせじ砌に匂ふたちばなは種もちとせのときはなるかげ

故郷橘 同年九月四日外宮御法樂

たちばなのかげふむ道も苔おひてかさへつゆけき故郷のには

簷廬橘 延享五年五月二十一日

かりふきし軒の菖蒲はをり過ぎて五月雨ちかみ匂ふたちばな

樗 元文四年六月二日

雨はるる枝のしづくもいひ知らず樗はな散るのきのゆふかぜ

里 樗 寛保元年五月二十四日

松に見し藤やときはにのこるかと樗はな咲くをかのべのさと

鷄 同四年五月二十二日

夏の夜の月にたたくやねであかす人をいさむる水鷄なるらむ

夏 月 延享二年五月二十四日

閨の戸もささですずしき月かげに來ぬ秋風やかよふたまくら

夏月涼 享保二十一年四月十二日

手すさみにむすぶもあかぬ眞清水の涼しさそへてやどる月影

夏月涼 寛保四年六月二十三日女房御月次

すずしさは雲のいづこも夏やなきただ秋風の夜半のつきかげ

水邊夏月 同三年六月九日御内會

涼しさをなほましみづの底きよみくるれば月の影ぞうつろふ

樹陰夏月 同四年六月四日御内會

露わけて行く道すずし夏ふかき木の間の月のもりのしたぐさ(かげイ)

愛瞿麥　寛保元年五月一日

おもふぞよめぐみの露の民草をわれなでし子の花のうへにも

愛瞿麥　同三年五月一日

世世かけてめづる言葉の花もそへわが敷島のやまとなでしこ

瞿麥帶露　同元年四月十六日

あさまだき誰がおきいでし名殘とてつゆけかるらむ常夏の花

夏草　同二年十二月二十四日

わけゆかむ道さへそこと夏草のしげりあひたる野邊のこの頃

夏草　寛延二年二月十六日

秋風もややちかからし夕ぐれは露見えそむるにはのなつぐさ

夏草　同二年九月一日内宮御法樂

かつ咲くは海人も知らじな夏草のしげき野島のはぎがはつ花

風前夏草　享保二十一年五月二十四日

夏草のしげるなかにも荻の葉はわきてや風のやどりなるらむ

風前夏草　寛保四年六月二十一日

風わたる垣根の夕日かげそ(ろイ)ひて散る露すずしなびくなつぐさ

鵜河　同元年五月二十四日

鵜飼舟くだすもさぞな大井川なみにかずそふかがり火のかげ

山陰鵜河　元文四年五月三日

山かげにしばしさすまに鵜飼舟かはかみ白む瀨瀨のかがり火

照射　寛延二年二月二十四日

ともしする松の端山のうす煙あけゆくみねに燃えてのこれる

嶺照射　享保二十一年五月二十四日

みじか夜のみねのともしの影もはや白みてあくる横雲のそら

嶋螢　寛延二年三月七日住吉社御法樂

つりどののおばしま近く飛ぶほたる涼しさそふる池のなか嶋

蚊遣火 寛延二年六月十五日住吉社御法樂

すだき來ていとどねられぬ閨の中は暑さにかへて蚊遣をぞ焚く

氷室 延享三年二月二十五日聖廟御法樂

すずしとも知らじ氷室の山びとはいつも夏なき年をかさねて

夕立過 元文五年八月二十二日

ゆふだちは雲ものこらず空はれて日影うつろふ軒のたまみづ

遠夕立 享保二十一年五月十四日

大江山ゆふだつ雲のみねこゑていく野のみちも風やすずしき

雨後蟬 元文四年六月七日

雨はいま晴れゆく杜のこずゑよりふり出でて鳴く蟬のもろ聲

瀧邊蟬 寛保元年六月九日

ゆふぐれは松風すずし鳴く蟬のこゑもおちくる池のたきつせ

納涼 元文四年十月二十四日

立ちよりてむすぶ手すずし暑き日のかげはもりこぬ松の下水

納涼 寛保四年六月二十四日

立ちよれば飽かずもあるかなむすぶ手の雫涼しき山の井の水

樹陰納涼 同三年閏四月十六日

いつとなき松の木蔭は夏をさへ知らですずしき風や吹くらむ

夏露 享保二十一年五月二十一日

しらつゆも野邊の草葉にこむ秋の花のちぎりを結びてやおく

夏杉 寛保二年六月四日

あふ坂やはやく過ぎゆく夕立のなごりすずしき杉のしたみち

夏聲 同年五月二十四日

ゆふぐれは岩もる清水まつ風のこゑもすずしき山のしたかげ

夏色 同

この頃のあつさを時とうつる日のくれなゐ匂ふなでしこの花

夏　香　寛保二年五月二十四日

空だきも袖にしめりて五月雨のしづけき窓ににほふたちばな

夏居所　元文四年六月七日

夏もなほ清くすずしき殿の中の母屋のとばりに風もかよひて

夏　衣　同五年閏七月二十五日

白妙の色にさくらのにほひをも殘せかとりのきぬのおひかぜ

夏　祝　寛保二年四月十七日御内會

いにしへにありし氷室の貢物たえぬためしも我れよりぞ見む

御裳濯河　同年八月二十四日

かみかぜや御裳濯河の月かげにかけてすずしき波のしらゆふ

秋

初　秋　寛延二年九月四日外宮御法樂

露のめぐみ深き千五百の秋は來ぬうるふ瑞穗の國ゆたかにて

初秋月　寛保四年七月三日御内會

大方のちぢにもの思ふ秋きぬとゆふべの月のまづや身にしむ

初秋露　延享四年二月二十五日聖廟御法樂

秋とだに風も吹きあへぬ朝戸出に淺茅がうへの露ぞこぼるる

泉邊初秋　同二年二月二十四日

秋きぬと岩間の清水けさよりはわきてすずしき松のしたかげ

初秋衣　同年二月二十二日水無瀨宮御法樂

吹きかへて昨日にも似ぬ朝戸出のころもで涼し秋のはつかぜ

新　秋　同五年二月二十五日聖廟御法樂

萩の葉のつゆにほのめく夕月もいろ見えそむる秋のはつかせ

新秋曉 寛保二年六月二十五日聖廟御法樂

雲のいろ風のおとさへ身にしみて來る秋しるきあかつきの空

殘暑 享保二十一年七月二十四日

みそぎせし河瀨の浪もたちかへり秋にあつさのなど殘るらむ

殘暑 寛延二年六月二十四日

西こそとすずむ端居のくれかけて入日のなごり秋としもなき

七夕雲 元文三年七月二十三日

待ちえたる雲のころもの秋風はうらめづらしく星やおもはむ

七夕地儀 同五年七夕

つつゐつのいつしか涼し一葉ちる桐の木の間のほしあひの影

七夕薄 寛保元年七夕

たなばたはつま(ハイ)待つくれの初尾花まねく袂もこころあるらし

七夕手向 享保二十一年七夕

星合の秋いくめぐり雲の上にたむくる今日のやまとことの葉

七夕琴 寛保二年七夕

秋かせにしらぶる夜半の琴の音やたなばたつめも心ひくらし

七夕瑤琴 同三年七夕

世のつねのしらべにはあらぬ玉琴やしたひにかよふ天の河風

七夕後朝 同二年七月八日

手向けおきし軒端の梶のあさつゆや星のわかれの涙なるらむ

乞巧奠 同二年七夕

星まつる庭のけはひ(ヨモイ)もふるき世のためしかはらぬ雲の上の秋

乞巧奠 寛延二年八月二十八日

待ちふかす星合の空もすめる夜の眞砂路てらす庭のともし火

二星契久 延享二年七夕

神代より絶えぬいもせの道しあれば天津星合の秋もつきせず

織女契久　延享五年七夕

いく千代と願のいともする忍ながき星のちぎりの秋にかけつつ

今宵織女渡天河　寛保四年七夕

波の間もふくる夜をしく星やおもふ天の河原の淺瀬たどりて

牛女年年渡　元文三年七夕

瀬にかはるうらみも知らで天の河いく年波かわたりきつらむ

夜深思牛女　寛保元年七夕

きぬぎぬの別やかねて思ふらむ小夜も更け行くほしあひの空

憶牛女言志　寛延二年七夕

このゆふべ嬉しき瀬にも逢ふ星のこころをぞ汲む天のかは水

烏鵲成橋　元文四年七夕

更くる夜にしろきを見れば星合の影すみわたるかささぎの橋

萩告秋　寛延二年十一月

秋きぬとつげのまくらの萩のころ夢かと思へば閨のはつかせ

夕萩　元文四年二月二十八日

雲まよふゆふべの空をながむれば軒端の萩にあきかせぞ吹く

萩驚夢　寛保四年五月二十五日

そよやげに秋なりけりな風の音の見し夢さます軒のしたをぎ

萩　元文五年六月二十四日

あき萩の花にこころやひかれきて夕露わくる野邊のをぐるま

夕萩　同年閏七月四日

くれそはば月をも花にやどからむこの夕露のあかぬあきはぎ

野萩　寛保元年十月十八日

紅葉にもまさるにしきを立田山すそ野の萩のはなのさかりは

水邊萩　同三年十一月五日春日社御法樂

みかは水はる見しいろに藤壺のおもかげうつす萩の戸のあき

萩如錦　寛保元年八月九日

もみぢにもならべて見ばや紫のにはにいろ濃き萩のにしきを

右記錄所前庭萩盛於其所羨御花

女郎花　元文五年七月二十七日

白露の玉かづらしてませの中になまめく秋のをみなへしかな

女郎花　寛保四年七月二十四日

女郎花あだ名たてじとくちなしの色をかごとに袖ふれて見む

女郎花　寛延元年十二月二十三日住吉社御法樂

女郎花よそ目はむせる粟津野にたれ種まきて生ひはじめけむ

女郎花交墻　寛保二年二月、二十二日水無瀬宮御法樂

なびきふす垣根の露のをみなへし尾花が袖をたまくらにして

薄出穂　同年八月二十五日御内會

夕月夜しろきを見れば穂に出づる尾花が袖にあきかぜぞ吹く

刈萱　同年七月二十四日

露霜の秋ふけぬらしうらがるる野邊のかるかや風にみだれて

槿花　享保二十一年七月二十四日

あさがほの花にあだなるしるべして籬の露ややがてこぼるる

露底槿　寛保二年七月八日御内會

咲き出づるまがきは霧の下露にぬれて色そふ今朝のあさがほ

竹露　同四年二月二十四日

立ちわたる外面の霧のあさぼらけ訪へば露ける竹のしたいほ

これもまた千代の數かも呉竹のうてなにみがく露のしらたま

露如玉　同四年七月二十七日

なべておくたぐひにもあらじ處がら玉をしきける つゆの臺は

尋蟲　延享二年閏十二月八日

蟲の音をとめてぞ聞かむ夕露の野邊の千草のはなみがてらに

尋蟲聲 延享五年八月二十七日住吉社御法樂

野を遠く夕づゆわけて松むしの聲するかたをたづねてぞゆく

聞蟲 享保二十一年七月一日

さまざまの花のにしきにみだれあひて機織る蟲の聲も隙なき

曉更蟲 寛保四年七月二十四日

つゆしろき淺茅が月も身にしみて蟲の音さびしあかつきの庭

蟲聲滋 元文三年八月九日

秋の野にみだれて鳴くも百草のつゆよりしげき蟲のこゑごゑ

田家秋風 同六年七月十七日

小田の庵やひかぬ鳴子もおとづれてなびく稻葉のつゆの秋風

海邊鹿 延享四年六月十八日

霧わたる波路の月にいそやまの鹿の音とほくおくるうらかせ

秋夕 享保二十一年二月二十四日

それとなく袂ぞ露にぬれにける何をながめのあきのゆふぐれ

浦秋夕 寛保四年八月二十八日柿本社御法樂

くれそむる海士の磯屋の夕けぶり霧に立ちそふ秋のうらなみ

田稻妻 享保二十一年七月二十一日

稻妻のやどるひかりもよひよひは穗に出でけりな小山田の秋

月 寛保四年十二月二十二日水無瀨宮御法樂

水無瀨川そのよの秋の面影もこころにうかぶ夜半のつきかな

月 延享二年四月二十四日

眺めつつ身はいたづらになれなれし雲井の秋の月もやさしき

待月 寛延二年四月二十五日御內會

暮るるより遲しと月を待ちかねて立ちて見居て見むかふ山の端

閑待月 延享五年十月二十八日玉津島社御法樂

ながめつつ月待つ空もくれそひて山かすかなる峯のまつかせ

閑待月　延享四年二月二十二日水無瀬宮御法樂

ことしげき世をば忘れてこむ秋はしづかに洞の月をめでまし

獨見月　元文五年六月八日

吹く笛もねぞすみまさる雲の上や更けゆくつきに獨むかひて

未出月　寛保三年八月十五日

さしのぼる影も待ち見む山の端の月になかけそ風のうきぐも

初昇月　元文三年八月十五日

暮れぬ間のこころにかかる浮雲も晴れゆく峯をいづる月かげ

初昇月　寛延二年八月十五日

あきかせに雲もはれゆく山松のこずゑはなるる嶺のつきかげ

十三夜待月　元文三年九月十三日

最中には雨になりつるうらみさへ晴れむ今宵の月ぞ待たるる

十三夜月　同五年九月十三日

めでそめし昔はさぞな我が國の世世に名だかきながつきの影

霧間月　同三年七月十日

まきあぐるこすの外山の薄霧にたえだえ月のかげぞもりくる

山月明　同三年九月三日

秋の色は知らぬ常磐の山の端に月のかつらぞひとり照りそふ

波　月　寛保三年五月二十四日

おちたぎつ岩こす波のかずかずにひかりも玉と散らす月かな

瀧邊月　同二年九月十三日

千代のかずまなくも散るかすむ月にくもらぬ池の瀧のしら玉

濱邊月　元文五年九月十三日

咲くきくの花か波かと月かげの眞砂地しろきふきあげのはま

都　月　延享五年七月二十一日住吉社御法樂

すべらぎの代代の都に見るかげやげに日の本のなかぞらの月

禁中月　延享二年五月二十五日聖廟御法樂

秋いくよながめし代代のいにしへを仰ぐもたかき雲の上の月

禁中翫月　寛保元年九月十三日

ももしきやうてなの竹のよよの秋月にぞみがく露のことの葉

社頭月　延享五年二月十三日玉津島社御法樂

神垣や鳥居も見えてすむ月のかげも木の間をもりのこがくれ

閑居月　寛保元年三月十六日

いとど猶こころもすみて靜けしなむぐらのやどの秋の夜の月

田家月　元文三年八月十五日

もりあかす門田の庵のいなむしろかたしく袖の月やさびしき

里月　寛保二年八月十八日御内會

ところがら名にし負ひたる久方のかつらの里の月のさやけさ

名所月　寛保四年六月二十五日聖廟御法樂

あふぎ見よ心づくしのくまもなく照らす北野の秋のつきかげ

名所月　延享三年三月十八日柿本社御法樂

霧はれて嶋もかくれずくもりなき月のあかしの秋のうらなみ

竹間月　寛保二年八月十五日

さやけしな散る露見えて風すさぶ竹の葉わけの窓のつきかげ

月前露　同四年九月十三日

下葉までとめきてやどる月にこそ淺茅が露もひかりそひけれ

月前霜　同二年九月十三日

秋さむき霜の眞砂の沓のおとに小簾もる月もかげぞ身にしむ

月前薄　同四年八月十五日

よるよるは月もそでにや宿るらむ招く尾花がつゆをよすがに

月前柞　同元年八月十五日

色うすきははそのうへも照りまさる佐保の山邊の月の隈なさ

月下柞 延享四年八月十五日

風わたるかた山かげの霧はれてはそも月のいろぞ照りそふ

月前松 同二年八月十二日

くもるかと見れば尾上の松風のしぐれに晴るる月のさやけさ

月前椎 寛保四年八月十六日

松ならでこれももみぢぬ椎の葉のこずゑの秋を月ぞ見せける

袖上月 同四年六月一日玉津島社御法樂

思ひやる袖にも月はやどりけり小田のかりほの露やいかにと

秋月入簾 延享二年九月十三日

玉すだれ夜ごろながめの秋ふけてもる月影もしぐれがちなる

月契秋 寛保二年二月二十五日聖廟御法樂

めでて見る月も幾千代すゑとほき雲井の秋にちぎりてやすむ

月契千秋 同三年九月十三日

四つの海なみたたぬ世を千千の秋ちぎりてすめる池の月かげ

寄月祝國 元文三年九月十三日

見てぞおもふ雲井の月は秋津洲の外にいかなる影にすむやと

暮天雁 同三年六月二十五日聖廟御法樂

うす墨の筆のあとかと夕ぐれの雲につらなるかりのたまづさ

擣衣 寛保三年九月二十四日

霜しろきわらやの軒の月ふけて秋かぜさむみころもうつこゑ

擣衣 延享三年六月十三日

賤の女は秋もふけぬとこのごろや夜さむの衣うちあかすらむ

擣衣 寛延二年九月一日内宮御法樂

夢さます遠のきぬたにおどろけば鳥がねしらむ山もとのさと

曙鳴 同年十二月五日住吉社御法樂

淺茅生の霜も身にしむあけぼのの月に鳴たつ野邊のうすぎり

鶉　寛保三年六月二五日聖廟御法樂

秋もいまする野のくさのつゆしもに床さむからし鶉なくこゑ

野分　寛延二年八月十五日住吉社御法樂

野分してあれしかきねに蟲の籠の露かふそでも花とみだるる

月前菊　元文五年九月十八日

ひまとめてこすもる夜半の秋かせに月かげながらにほふ白菊

月前菊花　同四年重陽

夕ぐれの眞砂地しろき月の色にまがはぬ菊のにほふあきかせ

谷菊　享保二十一年四月十二日

咲く菊のさかりに匂ふこの頃はみたにも秋をよそとやは見る

露光宿菊　寛保元年重陽

咲く菊の花をひかりにおく露も玉をかざれるませのうちかな

籬菊　同年五月二十五日

うつし植うる花はちとせの秋をこの籬にこめてにほふ菊かも

籬菊新綻　延享五年重陽

ませの中に星の林とみせて咲く雲井のにはのしらぎくのはな

籬菊色色　寛保三年重陽

今日といへばかずみる枝のきせわたもあかぬ籬のきくの色色

菊粧如錦　元文五年重陽

花ぞのの秋のにしきを菊に見てやなぎさくらの春もわすれつ

菊香隨風　同三年重陽

匂ふなり花もいろいろの菊のとにあけむらさきの袖のおひ風

菊花薫袖　寛保二年重陽

千千の秋つきぬにほひや我が袖にうつす雲井の庭のしらぎく

菊花宴久　同四年重陽

今日ごとにつきせぬ菊の盃にかねて千とせのあきもくみしる　一七八

菊　移　寛保四年八月二十四日

めでて見る花のまがきの霜にややうつる色しもあかぬ菊かな

松　蔦　同元年七月二十四日

松風のしぐれや染めて秋あさきこずゑの蔦のいろに出づらむ

紅　葉　元文三年七月二十七日

うすくこくそむる錦のたつた山いくむらたたむ峯のもみぢ葉

紅　葉　寛保二年六月十二日

この殿ののきばの紅葉（もみぢば）くれなゐのとばりの錦いろも添ふらし

紅　葉　同四年十月十日柿本社御法樂

鹿の音もなほおく深きもみぢ葉の木かげわけゆく秋の山ぶみ

紅　葉　寛延二年八月十二日

きて見ずばよるの錦のくらぶやま谷かげ深く染めしもみぢば

翫紅葉　寛保二年十月二十一日

龍鳥の船もうかべて池ひろみめづるみぎはのもみぢ葉のかげ

紅葉淺　同三年十一月二十八日

露霜のまだふかからぬ初入はいろもおくあるやまのもみぢ葉

紅葉深　同二年七月十日

今朝はまた染めます色よ昨日さへ淺くやは見しにはの紅葉ば

紅葉色深　同三年十月四日

立田姫こころわけてや薄く濃く山を染めなす木木のもみぢ葉

紅葉多　同四年十月四日

ここのへに錦かさねて染めわたすかげも大内のやまの紅葉ば

紅葉處處　延享五年閏十月一日

立田姫みやこの錦いくちはたをりはへ染むる四方のもみぢ葉

月前紅葉　同年九月十三日

露ながら手折るもみぢにかげとめて月のかつらをかざす仙人

霧籠紅葉　寛保二年九月二十四日

夕日かげへだつる霧のほのぼのと匂ふよそめや峯のもみぢ葉

紅葉增雨　同年三月十五日

村時雨降りいで染むるくれなゐの濡れて乾かぬ木木ぞ色こき

紅葉增雨　同年同月十四日

たつの池の柳にはあらぬもみぢ葉も雨にぞ深き色は添ひぬる

瀧紅葉　延享三年二月二十四日

枝かはすもみぢおちきて松風のしぐれぞ染むる瀧のしらいと

秋霜　同五年六月二十六日玉津島社御法樂

秋ふけぬ夜さむの月もかげ冴えて霜おきまよふ床のさむしろ

秋河　元文三年八月二十五日御内會

かぎりなき秋をやけふ(つき)も契るらむみもすそ川の清きながれに

秋草欲枯　寛保二年九月二十四日

花にみし秋もすゑ野の霜さえて冬がれいそぐ千くさももくさ

秋窓　延享五年八月二十七日玉津島社御法樂

はるばると夕日に匂ふ野田かけてながめはてなき秋の山まど

秋眺望　元文五年六月十二日御内會

あさぼらけ霧のたえ間にほの見えて波にいさよふ宇治の柴舟

秋祝　延享四年七月七日

洞のうちはここもよろづ代白菊の花のした露ふちとなるまで

小倉山　寛保二年八月二十四日

秋ふかくなりにけらしな小倉山木の葉いろづき鹿ぞ鳴くなる

詠月和歌十五首　元文三年八月十五日

待月

名にしおふ影は今宵とかねてより待つとは知るや山の端の月

見月

煙にもくもらばをしと衞士もいま庭火たきさし月や見るらむ

翫月

あかず思ふ月の夜ごとの言の葉もつきせぬ世世の雲の上の秋

思月

をしと思ふこころにかかる隈なれや月のゆくへの山の端の雲

憐月

もる水の音もすみゆく殿のうちに更くる夜をしくむかふ月影

嶺上月

秋の月くまなき空に富士の峯の雲もひかりやみがき添ふらむ

原上月

露しろき淺茅が原のむしのねも更けゆく月にあきかせぞ吹く

澤邊月

影すごき澤邊の月のふくる夜にあはれそへたる鳴のはねがき

島上月

松島やをじまの波のよるの月なれぬる海士もあだにやは見む

洛陽月

わが國の最中なりとや月もなほみやこの空に照りまさるらむ

寄月旅行

旅ごろもわくらの山の露ながらたもとに月のかげをやどして

寄月眺望

ながめやる心のはてもなかりけり月影ひろきむさし野のはら

寄月述懷

百敷やしのぶにあまるいにしへを今ものきばの月にしたひて

寄月神祇

へだてなくてらす月にもあふぎ見よ塵に交はる神のこころを

寄月祝言

みかは水たえぬながれにいく千代を契りてかすむ秋の夜の月

冬

初冬雲 延享三年十月十九日

今朝かふる秋と冬とのきぬぎぬに空さへ雲のそでぞしぐるる

初冬風 寛延二年十月六日玉津島社御法樂

いとはやも嵐に門をたたかせて誰が待つ冬の今朝はきぬらむ

初冬落葉 元文五年閏七月二十四日

秋の色を枝にとめじと山風の木の葉吹きはらふ冬はきにけり

時雨 延享二年十一月十九日

ながめつつ秋くれしより冬もまた日かずふりゆく村時雨かな

時雨過 寛保元年十月八日

むらしぐれ槇の板屋におとたてて過ぐれば晴るる窓の月かげ

薄暮時雨 延享五年閏十月二十二日住吉社御法樂